

若越郷土研究

49の2

予言獣アマビコ考

—「海彦」をてがかりに—

長野 栄 俊

一、坪川本『越前国主記』について

福井県立図書館蔵坪川家文書の中に、『越前国主記』という一冊の写本がある(図1)。以下「坪川本」という。この中に、本稿が主題とするアマビコに関する記述があるのだが、本題に入る前に『越前国主記』および坪川家について概観しておきたい。

(一)『越前国主記』について

『越前国主記』については、翻刻を載せる『越前若狭地誌叢書 続巻』において、杉原丈夫氏による詳細な解題があるため、以下の記述もこれに拠りたい。

『越前国主記』は、越前国の国主名(国司、守護、領主、大名など)を列記したもので、

長野 予言獣アマビコ考

写本が比較的多く現存しており、大別すると「A無著者名本」と「B四王天本」の二系統に分けられる(以後、それぞれ「A系」「B系」と略す)。坪川本は、題簽に「越前国主記 全」、巻頭には「越前国主記」と記され、法量が縦二五・五×横一六・五cm。袋綴じを仮綴じした簡易な装訂で、表紙には反故紙を用いている。全三六丁の内訳は、内容から次に示すような五部に分けることができる。

○第一〜四丁「第一部」

国造や国守、国司、国郡制度についての概略を記す。A系のみに見られる特徴。

○第五〜二七丁「第二部」

国主記本文にあたる部分。恵美押勝から松平宗矩に至る一四二名の人名を「○」と「△」の記号とともに列記。付箋や貼り込みによる若干の増補あり。人名の列記が、恵美押勝から始まる点はA系の顕著な特色で、記号と人名を併記するのはB系の特色。二七丁末には「享保十八癸巳曆正月吉 四王天又兵衛周信記」という記載あり。

○第二八丁「第三部」

「天正以後慶長迄越前国司并地頭領主居城

概表」と題された一覧表を袋綴したものの。越前国内の諸城と領主名を記述。他の国主記には見られず、坪川本独自の内容。この丁のみ毎半葉七行で版心に「足羽郡」と印刷された罫紙を使用。ノドに「明治十三年十二月十九日調上」という墨書あり。

○第二九〜三五丁「第四部」

「覺書」と題され、「黒龍川之事」「往生院之事」などの地誌的考証を六項目記載。国主記に「覺書」が付されるのはB系の特色。本奥書に「享保十八癸丑歲正月吉旦 四王天又兵衛周信記之」とあり、改行して「文政十川野為近写」、書写奥書には「文久元辛酉歲十月日 渡部氏方借写取 仁吉筆」とある。

○第三六丁「第五部」

「海彦」についての記述と図像。内容的には国主記とは全く無関係で、現存する他の写本には見られない。この丁のみ袋綴ではないが、半紙を半裁した料紙を用い、小口には裂いた痕跡がある。「天保十五年辰春」の年代表記。

以上、坪川本はA・B両方の特徴を併せ持つが、第二、四部の末尾に「四王天又兵衛周

「信記」という記載が見られ、特に第四部に就いては、B系松平本と比較すると内容・用字はもとよりルビや誤字に至るまで一致する。これらのことから坪川本は、B系の写本である川野本（渡部氏所持）を更に仁吉が書写したものである、と位置付けられる。

次に坪川本の成立年代を考察したい。明記される筆写年は、第三部の明治一三（一八八〇）年、第四部の文久元（一八六一）年、第五部の天保一五（一八四四）年の三つである。

第一部と第二部に年代表記はないが、国主記諸本の構成と比較すれば明らかのように、本来は第一・二・四部だけで一冊の本を構成していたはずである。従ってこれらは、文久元年に仁吉が渡部氏から借り写したものと見てよい。次に明治一三年に著された第三部だが、この丁のみ料紙と筆致が異なっているが、これも恐らくは仁吉が書いたと考えてよいだろう。明治一三年以後のある時点で、仁吉の手によって文久元年の写本（第一・二・四部）に第三部が挟み込まれ、綴じ直されたものと考えられる。どのような経緯で一緒に綴じこまれたのか、手がかりすら見当たらない

のが、天保一五年の第五部・海彦の記載である。筆致は第一・二・四部と類似するようにも見える。渡部氏から借りた国主記に元々書かれていたものを、一緒に写したもののなか。或いは、表紙にも反故紙が用いられているように、元は反故紙としてあったものを、内容的に興味を引かれたために、一緒に本文に綴じ込んだものなのか。渡部氏所持本の所在が確認できないため、仁吉が敢えて内容に關係のない「海彦」の絵と文を載せた（綴じ込んだ）真意を窺い知ることはできない。しかし、第五部が天保一五年に書かれたものであるにせよ、後の時代に写されたものであるにせよ、特に年代を偽って書く理由も見当たらない。従って筆写年はともかく、海彦に関する記載内容自体は、天保一五年のものであることを確認しておきたい。

（二）坪川家および仁吉について

次に坪川家についても『福井市史』の解題⁴を参考に概観しておく。

坪川家は足羽郡種池村（現福井市種池）の旧家である。代々の当主は「武兵衛」を名乗り、近世には村の庄屋を、近代に入ってから

は戸長や組合総代を勤めている。種池村は、日野川・江端川の合流地右岸の農村で、福井城からは南西の方向に直線距離で約5km、北陸道からは2kmほど西に入ったところに位置する。「正保郷帳」によると、田方二九六石余、畠方一一六石余、計四一三石の村で、近世を通じて福井藩領であった（一村全部が府中本多氏の知行所）。安政元（一八五四）年正月「御高持并雑家傭五人組御改帳」によれば、村内の家数二九軒のうち高持は一九軒であり、このうち一六九石余（村高の約四〇％）を占める豪農が坪川家であった⁵。

現在、福井県立図書館で所蔵される坪川家文書は、昭和四〇年代に坪川武雄氏より寄贈されたものである。文書群は未整理も多いが、把握されている限りで、一八世紀半ばから幕末までの近世文書約三〇〇点および明治以降の文書約四五〇点ほか書籍などから成っており、特に近代初頭の地方制度を知る上で重要な史料が豊富に含まれている。

さて、坪川本『越前国主記』に筆写者として名前が見える仁吉だが、弘化三（一八四六）年一月二日、父武兵衛、母センとの間に

生まれている。仁吉には年子の兄武兵衛（武平）がおり、安政五（一八五八）年に庄屋を勤めていた父武兵衛が病死すると、年若い武兵衛が坪川家の当主になっている。仁吉が渡部氏から借りた国主記を筆写したのは、文久元年、数えで一六歳の時であるが、一方で第五部「海彦」に見える年代、天保一五年に仁吉はまだ生まれていない。従って仁吉が「海彦」に関する情報を見出し、それをリアルタイムに書き記したとは考えられない。しかし天保一五年に書かれた「海彦」の記載を、後の時代に仁吉が書き写したという可能性は残される。

ところで、この時仁吉に国主記を貸した渡部氏とは、仁吉の母の生家であり、当時は従弟にあたる與四郎（明治になり島勝應と改名）が当主であった。丹生郡笹谷村（現清水町笹谷）にあった渡部家も坪川家同様、村の豪農層であり、京都の医師浅井思良に学んだという與四郎は、家の経営の傍ら寺子屋を開き、漢方医として村の医療にも従事していた^⑥。早くに父を亡くしたためか、当時、渡部家と坪川家との往来は頻繁に行われており、

仁吉も度々渡部家を訪れていた^⑧。坪川家には識字計数に関する書籍にとどまらない多様な蔵書が伝わっているが、特に『越前国主記』を含む越前や福井藩に関する史書・地誌類のほとんどは、渡部家の蔵書を写したものである^⑨。上方帰りの在村文化人を従弟に持つため、頻繁な往来の中から様々な情報や知が坪川家にもたらされたのではないだろうか。

仁吉に話を戻そう。元治元年「孝明天皇御用字ニ付御触有之」という理由で、仁吉は二吉と改名しており、明治五年、二七歳の時には、三郎と改名している^⑩。この年から兄武兵衛が戸長となったため、三郎も公務を手伝っていたと見られ、『宝曆自至壬申戸籍畧記全』(明治一二年)など戸籍に関する文書作成者に、三郎の名前が見えている。明治二年、妻子を持たなかった兄が、四五歳でこの世を去ると、坪川家の家督を三郎が継ぐことになる。その後三郎は、地域の尋常高等小学校新設に際しては敷地の提供や多額の寄付を行っており、洪水の際にも私財を投げ打って罹災民の救済にあたったという。明治四一年七月三日、まだ幼い子どもたちを残し、三郎は六

一歳で病没している^⑪。

二、「海彦（アマビコ）」について

本章では第五部に記された「海彦」について詳しく見ていきたい（図2）。

越後国浦辺二而海中方出候而、當辰年日本之人七歩通り可死、我が形の繪圖を見たる人ハ死をのかる、となん申しき

海彦之形

天保十五年辰春

越後国の浦辺で海中から出てきた海彦が「当辰年（天保一五）に日本人の七割が死ぬ。しかし私の姿を描いた絵図を見た者は死を逃れることができる」と言った、という。また「海彦之形」として、頭部からいきなり長い三本足が生えたような、異形の物を描いている。顔面を含め全身には短い毛が生えており、坊主頭で、顔には人間のような形の耳と真ん丸な目、そして少し突き出した口（唇と歯があるように見える）が描かれる。「海彦」の漢字に振られたルビから、「アマビコ」または「アマビコ」と読むことがわかる。紙を裏から透かすと、後頭部や口、足の爪など数

箇所修正した痕跡が見られ、頭髮や体毛もかなり細かく描かれていることから、落書き程度に描いたものではなさそうである。明らかな特徴としては、やはり三本足であることが挙げられよう。

では「海彦」とは一体何者なのか。妖怪のようにも見えるが、『日本国語大辞典(第二版)¹²⁾に「海彦」の項目がないことから、一般的によく知られたものではないことがわかる。数多くの妖怪名を収録する『全国妖怪事典』¹³⁾と『妖怪事典』¹⁴⁾にも「アマビ(ビ)コ」の名は見えない。しかし『妖怪事典』には次のように「アマビエ」という項目がある。

「弘化三(一八四六)年四月中旬と記された瓦版に書かれているもの。肥後国(熊本県)の海中に毎夜光るものがあるので、ある役人が行って見たところ、アマビエと名乗る化け物が現れて、「当年より六ヶ月は豊作となるが、もし流行病が流行したら人々に私の写しを見せるように」といって再び海中に没したという。この瓦版には肥後の役人が写したという図があり、髪の毛が長く、くちばしを持った人魚のようなアマビエの姿が描かれている。

湯本豪一の『明治妖怪新聞』によれば、アマビエはアマビコのことではないかとしている。アマビコは瓦版や絵入り新聞に見える妖怪で、あま彦、天彦、天日子などと書かれる。

病氣や豊凶の予言をし、その絵姿を持つていれば難から逃れられるという、件やグダベ、神社姫といった妖怪をほぼ同じものといえる。アマビコの記事を別の瓦版に写す際、間違えてアマビエと記してしまったのだというのが湯本氏の説である。¹⁵⁾

以上、事典の記載だけで判断すると、出現場所や出現年、形態などは異なるものの、「アマビエ」と坪川本「海彦」との間には共通点も見られる。また「アマビエ」は「アマビコ」を誤記したもので、「あま彦」「天彦」「天日子」と書かれる事もある、という。

ここに引かれる湯本豪一氏は妖怪蒐集家として知られており、妖怪に関する著書や論文も多数著している。¹⁶⁾中でもアマビコに関して「妖怪『アマビエ』の正体：記事から謎を解く」¹⁷⁾、「予言する幻獣—アマビコを中心に—」¹⁸⁾など幾つかの論文を著しており、氏が博搜、紹介したアマビコ関係資料により、これ

まで一般にはほとんど知られることのなかった謎の妖怪アマビコが、次第に明確な姿を持ったものになろうとしている。また二〇〇四年夏、湯本氏らが企画して川崎市市民ミュージアムで開催された「日本の幻獣展」は、わが国における未確認生物⇨幻獣を集大成したものであったが、その中でもアマビコは「予言と除災の幻獣」として紹介されている。²⁰⁾管見の限り、民俗学や「妖怪学」の研究史において、アマビコ(又は「アマビエ」)を正面から取り上げて考察を加えたものは、湯本氏の研究を置いて他にはない。²¹⁾また論文「予言する幻獣」でとりあげられた十数点の資料のほとんどが、氏によって初めてアマビコ関係資料として位置づけられたものでもある。²²⁾そのため以下に論を進めるに当たっても、湯本氏の成果に依拠するところは非常に大きい。氏のアマビコ論に加えて、ここに取って本稿を成すことに何らかの意味があるとすれば、それは第一には新出史料「海彦」を原初的なアマビコの事例として紹介すること、第二には湯本説以外にも、アマビコに影響を及ぼしたと考えられる別の要因を提起すること、にあ

る。また「海彦」は地方文書から見つかったため、ある程度は履歴が確認できる貴重な妖怪史料と考えるが、おそらく従来の地方文書の調査や自治体史編纂事業では、こうした史料のほとんどは看過されてきたのではないだろうか。今なお埋もれている妖怪や怪異に関する史料に、今後少しでも目の目が当てられる契機ともなるのであれば、本稿執筆の目的の大半は達成される。

以下、本章では坪川本「海彦」とアマビコ関連史料とを詳しく比較し、その特徴を明らかにする。その上でこれまでのアマビコ論の中に「海彦」を位置づけ、新たな視点からアマビコを捉えなおしてみたい。

なお本稿において、アマビコと記す場合は、妖怪アマビコ全般を指し、史料に登場する特定のアマビコは「海彦」や「アマビエ」など登場名を鍵括弧で括り表記する。また、厳密には呼び分けの必要があるのかもしれないが、本稿では「妖怪」と「幻獣」とを、ほぼ同義に用いている。²⁸⁾

(一) 形態の比較

現時点でアマビコと呼ばれる妖怪は、湯本

氏の紹介した七例に²⁹⁾、新出の「海彦」、それにおそらく今回初めての紹介となるであろう「天彦入道³⁰⁾」を加えた全九例が確認できる。まずは「海彦」と残りの八例とを、形態の面から比較してみたい。

これまで年代の確認できる最古のアマビコとされてきたのが、弘化三年四月中旬の摺物³¹⁾「肥後国海中の怪」に描かれる「アマビエ」である(図3・史料2)。その姿をみると、頭髮は非常に長い³²⁾が、顔には毛が無い。独特な形の目と耳を持ち、口(嘴)が尖っていて鳥のようにも見える。胴体は鱗(または羽毛)で覆われており、先が三つに割れた足または尾ビレのようなものが三本生えている。下半身を三本の足と見るならば、「海彦」との一致点を見出せるが、顔や髪、胴体の特徴、そして三本足の形状はあまりにも異なる。湯本氏によると、三本足の特徴は、神社姫と呼ばれる人魚に近い幻獣の系譜を引くものである³³⁾という。神社姫の図を見てみると、髪は長く、蛇のような胴体は鱗に覆われており、三本の剣と化した尾を持つ姿は、「アマビエ」に近いとも言える³⁴⁾。また村上健司氏も『妖怪

事典』の中で「髪の毛が長く、くちばしを持った人魚のような」という表現をしており、水木しげる氏も同様に「アマビエ」と人魚との類似性を示唆している³⁵⁾。文章には「光物」という描写以外、形態に関する記述は見られないため、これ以上の詳しい比較はできないが、描かれた絵だけから判断すると、人魚または魚類(鳥類)的特徴を持つ「アマビエ」と「海彦」との類似性は決して高くないと言える。

次に明治九(一八七六)年六月二二日の『長野新聞』に掲載された「尼彦・尼彦入道」と比較してみたい(図4・史料6)。以下「尼彦(新聞)」。非常に稚拙な絵のため、分析は困難だが、湯本氏が推測するように、頭から肩にかけての部位は、長い髪を表しているのだろう。後頭部から背中にかけては、背ビレあるいはタテガミのようなものが生えている。顔に毛は無いが、眉毛と鼻がある。頬と胴体には、体毛を表すものであるだろうか、縦線が何本も描かれている。下半身には「アマビエ」よりも更に魚類のヒレに近い形状のものが三本生えている。文中には「其身より光り

をはなちなど、其おそろしき形容」とあるだけで、これ以上の描写はない。「尼彦(新聞)」は、「海彦」よりは「アマビエ」に近い姿と言えよう。

三番目は、明治八(一八七五)年八月十四日の『東京日日新聞』に掲載された「天日子尊」である(図5・史料5)。無毛に見える顔はダルマまたは猿のように描かれ、真ん丸の目に鼻、口がある。体全体は短い毛で覆われているが、最も特徴的なのは明確に描かれた四本の足であろう。「アマビエ」と「尼彦(新聞)」の下半身にはヒレにも見える足が三本しかなかったのに対し、「天日子尊」にはしっかりと長い足が生えており、一見すると普通の四足動物にしか見えない。「アマビエ」尼彦(新聞)系とは異なる描かれ方である。

四番目は、「天日子尊」と非常に近い形態を持つ肉筆の「尼彦」である(図6・史料4)。以下「尼彦(肉筆)」系。顔を除く体中に体毛がびっしりと生えており、無毛の顔には丸い目、大きな団子鼻、口がある。四本描かれた足は「天日子尊」と比べると極端に短いが、鋭い四本の爪を生やしている。「天日子尊」

「尼彦(肉筆)」系と「海彦」とを比較すると、真ん丸な目と全身の体毛以外に類似点は見出せない(鋭い爪がある点は一致)。

五番目に見る摺物「尼彦入道」(図7・史料8)。以下「尼彦入道(摺物)」系は、顔は人間それも老人のようであり、鋭い目や大きく裂けた口、鼻と耳が描かれる。九本ある足には節が見え、鳥類の足の特徴を持つ。また体全体には羽毛または鱗状のものが生えており、翼または手のようなものが描かれる。羽毛か鱗か、また翼か手か、で判断は異なるが、足の形態からみても、鳥類との近似性を確認できるだろう。「アマビエ」系とも「天日子尊」系とも全く異なる種である。

以上、これまでに図像が確認されている五例のアマビエの形態を見てきたが、次のように系列化することができる。

- 「アマビエ」系…三本足(ヒレ状)、長髪、魚類に近い
- 「天日子尊」系…四本足、体中短毛(顔面無毛)、四足動物に近い
- 「尼彦入道(摺物)」系…九本足、羽毛

(鱗?)、翼?、鳥類に近い

次に図像は無いが、文章だけでアマビエの形態を伝える史料をみておきたい。

『東京曙新聞』明治一四(一八八一)年一月二〇日号では、東京で売り歩かれた「天彦」の図像を「光りを発せし異形の怪物」と表現している(史料7)。また『郵便報知新聞』明治一五年七月一〇日号では、東京で「猿に似たる三本足の怪獣」||「あま彦」が「虎列刺除」の摺物として配られた記事を載せている(史料3)。前者は詳しい形態が不明のため比較できないが、後者の「あま彦」が、猿に似て三本足である点は「海彦」と近いと言えるかもしれない。

また、昭和前期の民俗雑誌『旅と伝説』掲載の寺田傳一郎「八十翁談話―西郷合戦―」にも「天彦入道」の噂が載せられている(史料9)。西郷合戦(西南戦争)の前に「悪魔除け」の「まじなひ」として「天彦入道」の像が戸口に貼られた、という。この「天彦入道」は「地藏尊様の形をした入道」が墨絵で白紙に描かれたものであったらしい。足の本数は書かれないが「地藏尊様の形をした入

道」という点は、頭髮の短い「海彦」に近いかもしれない。

以上、図像と文章から形態を比較した結果、「海彦」は「三本足」という点では湯本氏の指摘するアマビコの特徴に一致するが、その三本足の形状がヒレ状ではなく、太くて長い点に特徴がある。また、胴体が短く、顔面と足に短い毛を生やしている点も他のアマビコには見られない特徴である。顔の印象は猿にも地蔵にも見えなくはないが、魚類や鳥類の特徴を持たない点だけは確かである。従って、いずれのアマビコの系統ともびたりとは合致しないものと位置づけられよう。

(二) 名称表記と出現場所の比較

次に九例のアマビコの名称表記についても比べておきたい。特に「アマ」にどの漢字を当てるかに注目し、次の四群に分類した。また出現場所を併記し、自ら棲み処を表明した場合も鍵括弧で記す(ただし『旅と伝説』掲載の「天彦入道」は、出現場所等の情報が一切ないので、名称表記のみを比較対象とした)。

○カナで表記

アマビエ(コ)(摺物)

肥後国海中

「私ハ海中ニ住」

あま彦(郵便報知新聞)

肥後国熊本御領分眞字郡

「我等ハ海中に住む」

○「海」を使用

海彦(坪川本)

越後国浦辺二而海中方

○「尼」を使用

尼彦・尼彦入道(長野新聞)

肥後の國青沼郡磯野濱

「我れは海中にて司執る」

尼彦(肉筆)

肥後国熊本縣御領分眞字郡

「我ハ海中に住む」

尼彦入道(摺物)

日向の国イリノ濱沖

○「天」を使用

天日子尊(東京日日新聞)

越後のくに湯澤驛邊の田の中

天彦(東京曙新聞)

西海の沖

「我は海中に住みて天部の諸神に仕ゆる」

天彦入道(旅と伝説)

出現場所と棲み処に着目すると、「天日子尊」を除く七例が、海中や浜、沖、浦辺など海に関係していることがわかる。その点から言えば、「アマ」に「海」の漢字を用いている唯一の例である「海彦」が、本来的、原初的な名称と考えられるのではないか。このことは坪川本が、天保一五(一八四四)年春に書かれた、年代が確認できる最古のアマビコ史料であることから裏付けられるだろう。逆に「天」の字を用いる三例は、いずれも明治期の例であり、本来的な用字ではないと考える。三例のうち「天日子」は記紀の神「天若日子」を想起させ、「尊」の字も付け足されていることから、神名に近い印象を与えることを狙ったものであろう。また「天彦」は、自らが述べているように、海中に住みながらも「天部の諸神」に仕えている、という身分設定から「天」の字を用いているのだらう。湯本氏は「天」をアマビコの本質と捉えているようだが、ほとんどの出現場所・棲み処が

海と関係すること、また最も古いアマビコⅡ「海」彦が発見されたことから、「海」こそが、アマビコの本来的用字であり、「天」や「厄」は後に権威付けや文飾で用いられたものと考えるべきではないか³⁷⁾。

次に出現場所の地名についても見ておきたい。八例中、特定の国名や地名を表記せず、漠然と「西海の沖」とするのは一例のみで、残りは肥後国が四例、日向国が一例、越後国が二例である。肥後国四例のうち、特定地名を表記せず「肥後国海中」とするのが一例、「青沼郡磯野濱」が一例、「眞字郡」が二例である。日向国は、郡名表記は無いが「イリノ浜沖」とだけある。越後国二例は、漠然と「越後国浦辺」とするのが一例、「湯澤驛」が一例である。なお、特定地名を明記する五例について地名辞典を調べると、肥後国の青沼郡・眞字郡はいずれも実在しない架空の地名である。また同じく日向国イリノ浜も、肥後国青沼郡磯野濱(イソノ浜)との類似性(転写時の誤記の可能性)は指摘できるが、イソノにせよイリノにせよ、いずれも地名辞典には載っていない。残る「越後のくに湯澤驛」

だけが、越後国魚沼郡に実在する宿駅として栄えた町である(ここでも架空郡名「肥後の國青沼郡」と実在地名「越後国魚沼郡」との類似性を指摘できる)。

ここで第一に注目すべきは、現時点で年代が確認できる最古のアマビコⅡ「海彦」が「越後国浦辺」に、またこれまでの最古例「アマビエ」が「肥後国海中」に現われた、とする点である。即ち古い二例が共に、出現地に特定地名を記していないのである。具体的地名や特定の人物名を書き加えていくことは、「情報が正確であるかのような印象を与え」と、湯本氏も指摘しているが、二例がともに、具体的地名と人物名を記していない点には、「海彦」が一連のアマビコ関係史料の中で、古い情報であることを再確認できるのである。

次に注目したいのが、越後国が予言する幻獣に関連の深い地域であったという点である。「人魚」³⁸⁾「亀女」³⁹⁾「光り物」⁴⁰⁾「光物」⁴¹⁾という四例の姿かたちの異なる予言獣が、それぞれ越後国福島潟に出現しており、豊作と疫病流行を予言し、自らの姿を描かせたという。また、

「にゐがたの濱べ」に出現した予言獣「大神社姫」の摺物も現存している。湯本氏も幻獣話の創生と、越後国福島潟との関係に着目しているが、「海彦」の出現地「越後国浦辺」も、あるいは福島潟と何らかの関係があるのかもしれない。ただし、先に注目した特定地名表記の書き加えの問題とも関わるが、福島潟の予言獣四例のうち年代が確認できる二例は、嘉永二(一八四九)年のものであり、天保一五年の「海彦」より後の幻獣である点に注意すべきである。

そして一方の肥後国についても、やはり別種の予言する幻獣の出現情報が二例残されている。年不詳だが「肥後国天草郡龍出村」には三本足の「山童」⁴²⁾が出現しており、明治九(一八七六)年には「肥後の國青島郡の海」に「アリエ」⁴³⁾という四足アマビコに似た形態の予言獣が出現している。ともに豊作と疫病を予言し、自らの姿を描かせたという。この「アリエ」の出現情報は「出雲の国の船頭が新潟県にて物語」⁴⁴⁾った、とあるように、北前船の船頭を通じてか、肥後から新潟Ⅱ越後に伝えられたとされる点は興味深い。一見他の

つながりもないように思える肥後と越後とが、線で結び付けられている。

ところで先にも指摘したが、「海彦」は「アマビエ」を二年遡り、年代を確認できる最古のアマビコ史料であるが、自らが「当辰年」と語り、「天保十五年辰春」の記載があることから、天保一五年に出現したことが明らかなアマビコとしても評価できる。その「海彦」が肥後ではなく、越後に出現したとする点は注目してよいだろう。実際のアマビコ出現地が、越後だったのか、肥後だったのか。またあるいは「我等は海中に住むあま彦と申者なり」〔郵便報知新聞〕と言っているように、アマビコは一体だけではなく複数いる種で、各地に出現していたのかもしれない。この問題について、本稿はこれ以上言及する用意がないが、アマビコだけではなく、他の予言獣の出現地とも比較した上で考察する必要があるだろう。

(三) 言説の比較と予言と除災の内容

八例のアマビコは、内容や長短に差はあるが、全てが自ら言葉を発している。その言説の内容は、災難の予言とその除災方法の教示

である。そのため湯本氏は、一連の予言する幻獣を「予言獣」または「予言と除災の幻獣」として分類、名づけをしている。予言する幻獣はアマビコだけではなく、有名なところでは「件^{くだ}」や「人魚」などがあり、他にも『日本

の幻獣』展では「天狗」や「大神社姫」「くたへ」「亀女」「山童」「アリエ」などが紹介されている。これらの幻獣の予言には大まかに言々と、形式・内容において次のようなパターンが見られる。まず(a)作物の豊凶を予言する。一方で(b1)悪病の流行と、その結果の(b2)大量死も予言する。そして(c)この災いから逃れる(Ⅱ除災の)方法を教示するのである。表一は、アマビコ八例の言説内容と比較するために作成したもので、時期による変遷や口承・書承等の関係を検討するために時系列順に並べてある。

言説内容の比較に移る前に、時系列順に並べるために行った年代比定の手続きを示しておく。八例のアマビコに関するテキストは、それを載せる史料の形式や構造が異なっている。すなわち、アマビコの出現と言説内容を肉筆や摺物で伝える一次情報もあれば【1・

4・8】、出現・言説の情報が伝わってきたことを伝える二次情報の摺物もある【2】。また新聞記事については、出現・言説に関する摺物などが配られたり、貼られたりしていることを伝えるものもあれば【3・7】、逆に出現・言説情報やアマビコの図面が貼られているという風聞が聞かれるが、それは誤りである、と情報そのものを否定する記事もある【6】。こうした差異を念頭に比定を行った結果は次の通りである。

1 「海彦」は天保一五年の出現情報を同年春に記したものの(の写しか)である。2 「アマビエ」は、出現年は不明だが、弘化三年四月の摺物であるため、出現年も弘化三年と見ておく。3 「あま彦」は明治一五年七月の新聞によるが、この時配り歩かれた摺物が安政五(一八五八)年のものと「文言の一字も相違せぬ」ものだったとあるため、安政五年と見なした。4 「尼彦」は肉筆史料で、年代表記がないが、文中に「肥後国熊本縣御領分」とあることより、廃藩置県(明治四年七月一四日)より後のテキストと推定した。5 「天日子尊」は出現日までが明確なため、明治八

年と断定。6「尼彦」は、他紙からの転載記事だが、明治九年のものと考えてよいだろう。7「天彦」は、明治一四年の新聞で、内容は天保年間（一八三〇～四四）に出現した「天彦」図に関する記事であるため、一見すると3の様に天保年間のテクストと見てよいようにも思える。しかし、この図はおそらくは明治一四年になって新たに作られたものであろう。というのも天保年間に出現した「天彦」が、三十余年後（明治一四年前後）に世界が消滅し、人種が絶滅するという予言をしたことは「今回噂さ高き来る十一月にハ世界一變するといふ説に符合す」る、と図を売り歩いた男たちが予定調和的な発言をしているためである。明治一四年一月の「世界一變」の噂とは、同年一月一五日から一五日間かけて世界が転覆する、という噂話のことを指す。これは当時かなり流行していた噂で、「世界轉覆奇談」という絵入りの摺物⁴⁶が九月二日に発行されたことも確認できる。つまり世界転覆の噂が先にあり、これにあわせて既にあった予言獣アマビコを変容させ、登場させたものが、新聞記事に掲載されたと考えられ

るのである。最後に8「天彦入道」は、摺物⁴⁶で年代表記はないが、文中に「熊本士族」とあることより、士族呼称が導入された明治二年六月二五日より後の史料と推定される。これを明治一四年の「天彦」より後に置いた理由は、「読売新聞」明治一五年八月三〇日の記事に、「コレラ病除けの守り」として「老人の面に鳥の足の付いたゑたいの分らぬ繪」が発売された、とあるためである。「尼彦入道（摺物）」の形態的特徴である老人顔と鳥足が、この記事に合致するため、8を明治一五年のコレラ除け守りと断定した。

では、これらを踏まえて言説内容の比較検討に移りたい。(a)については五例が、その年から六年間の作物の豊作を予言している。残り三例のうち「天日子尊」は、豊作ではなく、七年間の凶作を予言しており、最古の「海彦」と明治一四年の「天彦」とが、作物の豊凶を予言していない。

次に(b)についてだが、「海彦」は(b2)「七歩通り（一七割）」の大量死は予言しているが、その原因となる(b1)病気の流行は予言していない。先に六年間の豊作を予言

した五例は、表現は異なるが、全てが(b1)病気の流行を予言しており、その結果三例が(b2)「六分（一六割）」の大量死を予言している。この点「海彦」が「七歩」の死を予言しているのに比べると一割少ない。先に一例だけ凶作を予言していた「天日子尊」は、病気の流行ではなく凶作の結果として(b2)村の人口が半分になるという予言をしている。また(a)作物の豊凶の予言をしない明治一四年の「天彦」は、(b1)病気の流行も予言せず、(b2)具体的な割合での大量死も予言していない。代わりに三十余年後、天災のため世界が消滅するにあたり、人種が絶滅することを説いている(「世界一變」の噂)。

最後に(c)除災方法だが、自身(アマビコ)の姿を見たり、書き写したりすることを教示する点で共通するのを見える。しかし、その方法、行為を細かく分解してみると「見る」「写す」「張り置く」「祭る」「他人に見せる、知らせる」の五つに分けることができる。このうち基本となる行為は「見る」と「写す」と考え、残りは付加行為として捉えた。まず「見る」だけで除災される、とするのは「海

彦」のみである。また「見る」の延長行為である「張り置く」に関しては、「張り置く」＋「見る」が一例、「張り置く」＋「他人に知らせる」が一例となる。一方、自らの手で「写す」だけで除災されるものはないが、「写す」＋「見る」張り置くは二例、これに「祭る」を付け加えるのが一例となる。また「写す」＋「他人に見せる、知らせる」が二例見られる。ここでは、見たり、張り置いたりする行為により、アマビコの凶像が除災のための呪いの護符となること、また書き写したり、他人に見せ伝えるという行為により、その護符が広く伝播していくことにつながる点を確認しておきたい。

以上、アマビコの言説を比較した結果、「海彦」の言説が最も単純なものであり、明治に入ってからのアマビコの言説には、「劇烈の難病」や「敬ひ尊みて祭る」、「世界消滅」、「天災却て安樂長久の基ぬ」など多様な語が含まれ、その内容も豊富になっていることがわかる。そして予言内容（a・b）の構造を見てみると、「海彦」の予言が他の七例とは異なる特徴を幾つか持つことも見えてくる。

「海彦」は（a）作物の豊凶を予言していないし、（b1）病気の流行も予言していない。しかし（b2）予言する大量死の割合は他よりも多い（七歩通り）。つまり悪しきことしか予言していない。一方、「アマビエ」あま彦「尼彦（肉筆）」尼彦入道（摺物）「尼彦（新聞）」の五例は共通して、六ヶ年間の豊作、という良いことも予言した上で、病気の流行も予言している。また大量死の割合を示すものは三例が「六分」となっている。以上のことから、これら五例の間には相互の書承あるいは口承の関係が存在することが窺える。残る「天」ビコ二例は、七ヶ年の凶作予言をしたり、世界滅亡の予言をしたり、と他の五例とは明らかに異なる言説内容で、特に明治一四年の「天彦」が、同年に流行していた「世界一變」の噂の文脈で考えるべきことは、前述の通りである。

単純に考えると、アマビコが予言をする時、不安感や終末観をより強く打ち出すためには、単に悪しきことのみを予言し、また大量死予言においてもその割合を次第に増やしていく方が効果的と考える。しかし実際に

は、明らかに時代が後のアマビコが、良いことと悪しきことを併せて予言したり、死者の割合を「七割」から「六割」「半分」へと減らしたりしているのは、何を意味するのであろうか。一つの理由として、口承や書承の系譜が異なることが考えられる。つまり悪しきことしか予言せずに「七分死滅」を説く「海彦」と、良いことも予言して「六分死滅」を説く五例とは史料の書承・口承の系譜が異なるのではないか（「天」ビコ二例も系譜や文脈が異なる）。この系譜を考えるために、今度はアマビコとそれ以外の予言獣の言説を比較してみたい。

（四）その他の予言獣との比較、

「物言う猿」の影響
『日本の幻獣』展図録や、かわら版に関する書籍等⁴⁸を見てみると、アマビコ以外にも多くの予言獣がいたことがわかる。また随筆、風説書の中にも予言獣に関する記事が多く載せられている。本稿ではこれら全ての事例について検討することはできないが、先学の研究成果やデータベース等により、確認できた事例のみを表二にまとめた。⁴⁹

まず気づくのは、アマビコの言説がオリジナルなものではなく、先行する予言獣が何種類かいた、ということである。このうち「亀女（古図）」は突出して古いが、これは後の時代（年不詳）の錦絵に引用されたものであり、確かに寛文年間にこの通りの予言をしたかどうかは不明であるため、以下の考察からは除く。次に連続して登場するのは文政期（一八一八～三〇年）である。文政二年の「神社姫」は「異形の魚」で、人面蛇身、背や腹にはヒレがあり、尻尾にも三本の剣のような尾ビレがある。そのため湯本氏が三本足のアマビコに影響を与えた幻獣として評価したものである。一方、文政一〇～一二年の「くたへ」クダベ」などは、もう少し後の時代に現われる人面牛身の「件」へと連なるものであるが、文政期のものは必ずしも牛らしさが見られない。次は嘉永期（一八四八～五四）まで確認できないため、時系列順に並べるなら、天保一五年「海彦」と弘化三年「アマビエ」はこの間に位置づけられる。そこでアマビコに先行する「神社姫」と「クダベ」系幻獣の言説を、アマビコと比較してみたい。

まず、言説構造を見てみると「神社姫」は（a）作物の豊凶予言をしているが、クダベ系は全くしていない。一方で全てが（b1）病氣流行と（b2）大量死の予言をしているが、大量死割合を具体的に示すものは一例もない。（c）除災方法は「写す」「見る」「人に見せる」「張置」など様々である。構造に似た箇所は見られても、細部を見ると「海彦」「アマビエ」と一致する箇所は少なく、逆に期間が「七ヶ年」や「四五年」であったり、具体的な大量死割合を示さず「人多く死す」とだけ記したり、と差異が目立つ。

次に形態を比較すると、長髪、体に鱗、三本のヒレ（状の足）が一致する点で、「アマビエ」は「神社姫」から何らかの影響を受けていると言えるかもしれない。しかし「アマビエ」とは三本足の形態の異なる「海彦」と、「神社姫」との間に一致点は全く無いようだ。一方、クダベ系幻獣については「海彦」「アマビエ」ともに何らの類似点も見られない。今度は、嘉永期以後の予言獣および年不詳のものとはアマビコを比較してみたい。ここでは予言の期間と大量死割合に着目してみる。

アマビコでは期間「六ヶ年」は、弘化三年「アマビエ」に既に記されているが、他の予言獣で期間を「六ヶ年」とするものは明治九年「アリエ」のみである。次にアマビコで大量死割合を「七分」とするのは「海彦」のみ、「六分」とする最初のアマビコは安政五年「あま彦」まで見当たらない。他の予言獣では「七分」とする例は全く見られず、「六分」とするものは、嘉永二年「人魚」と「光物」、明治九年「アリエ」、年不詳「光り物」の四例が確認できた。以上のことから予言獣「アリエ」は、アマビコとかなり近い種、それもより時代が新しいため、アマビコの影響下に生まれた幻獣と推測される。また形態の点からは三本足を持つ「山童」がアマビコと共通する点を持ち、何らかの関係性が窺える。逆にアマビコに決定的な影響を与えたと考えられる予言獣は見つけられない。特に「七分通り」の大量死を予言する「海彦」のような予言獣はいないようである。

ところが、この「七歩通り」の大量死予言に注目していたところ、幻獣Ⅱ未確認生物ではない、現・既確認生物が「七歩通り」の

大量死を予言している事例が見つかった。石塚豊芥子『街談文々集要』巻二、文化一一(一八一四)年「第十八再正月流言」によると、同年四月上旬からの流言が「當年は世界七分通死亡致し、是を逃れ候には、再正月を祭候へば、右病難相除候」というものであった。後半の除災方法は全く異なるものの、前半の予言内容「當年…七分通…死」は「海彦」と一致する。この予言の出所は「川越の近在にある庚申塚の森に、猿三疋集りて言出せし」ことだったといひ、豊芥子は続けて「坂本日吉山王の神猿申けるは、当年は天下豊年なりと云、又一疋の猿云には、然ども人々の死亡多からんと云々、又一疋の申には、今年も明け新年と改め候はゞ、宜からんと申」という流言も伝えている。いずれの流言も、見ざる・言わざる・聞かざるの「三猿」によってなされている。そしてこの「もの言たる」猿の予言が「明言神猿記」と題され半紙二枚綴りで、町中で売り歩かれたというのである。同年九月、堺でも三猿が「人が三合二成ル(七分死滅)予言をし、再正月を除災方法として示したという話が、大和国で記録さ

れており、広範な広がりを見せた流言だったことがわかる。大量死の予言に際し、なぜ「人多く死す」ではなく、「六分」や「七分」といった具体的な数字を示す例があるのかは、別に検討すべき問題であるが、ここでは多くの予言例の中で、(b2)七分死滅を説くものが「海彦」と三猿の二例(川越・堺)のみであり、また(b1)病気の流行を説かず、(a)作物の豊凶も予言していない点も共通することから、先行する三猿が後発の「海彦」話の誕生や変容に何らかの影響を及ぼした可能性を指摘しておきたい。

一方、大量死割合の一致だけではなく、アマビコには、猿との関連性を持つ例も幾つかみられる。『郵便報知新聞』によると、安政五年に江戸で売られた摺物および明治一五年七月に東京市中で配り歩かれた摺物に描かれた「あま彦」は、「猿に似たる三本足の怪獣」であった。これは明治一五年八月の『読売新聞』が伝える、東京市中の繪草紙屋でコレラ病除けの守りとして売られた「三本足の猿の像」と同一のものである。また「あま彦」は「猿の聲にて人を呼」んだといひ、「尼彦

(肉筆)も同様に「猿の聲にて人を呼」んでいる。先の形態比較でも見たように、「海彦」をはじめ幾つかのアマビコ図像で猿との近似性を指摘することもできる。これまでアマビコの特徴としては「三本足」ばかりが目ざれてきたが、「物言う猿」的な要素も特徴の一つとして挙げられるのではないだろうか。また、数合わせになるが「三本足」と「三猿」との間にも何らかの関連性があるかもしれない。もちろん猿の持つ病除けとしての一面(病が去る)も見逃せない要素である。

ここで川越と坂本、堺の猿が示したという除災方法についても概観しておきたい。「再正月」「新年と改め」等とあるように、これは「疫病の流行に際し災厄を避けようとする心意から、正月儀礼を重ねて実施して、新しく年を取ってしまう」フォークロアで、「取越正月」「流行正月」等とも呼ばれるものである。平山敏治郎氏によれば、近世を通じて寛文七(一六六七)年、宝曆九(一七五九)年、明和八(一七七二)年、安永七(一七七八)年、文化一一年と五度にわたって流行している。このうち宝曆のものは、翌一〇年が「み

ろく十年辰の年(六〇年に一度の庚辰年には良からぬことが起こるといふ予感)に該当するため、それへの「予防」として流行したものである。これに対し安永・文化の流行は、眼前にあった疫病流行への対抗呪法として流行したものであった。また富士川游『日本疾病史』によると、文政五(一八二二)年十月、わが国で初めてコレラが大流行した年にも、播州赤穂で領主が「歳改」を命じており、時ならぬ正月行事が行われたという。本稿ではこれ以上詳しく「取越正月」について言及する用意はないが、文化一一年には「物言う猿(三猿)」が七割の大量死を予言し、その除災方法に「取越正月」のフォークロアを教示していたこと、また約三〇年後には、三本足で猿にも似た「海彦」が、同じく七割の大量死を予言し、今度は除災方法として自らの絵を見ることを教示したこと、この二つの間の類似点および相違点に注目したい。詳しくは次章で述べるが、近世には、見れば除災(特に病除け)という「眼福」のフォークロアも存在しており、ここでは「物言う猿(三猿)」の言説の後半部分(除災方法)が「取越正月」

から「眼福」に入れ替わったものが、アマビコであったという仮説を立てておきたい。

三、「海彦」は何のために書かれたのか

前章ではアマビコがどのような特徴を持つ妖怪であるのか、また「海彦」が他のアマビコや他の予言獣との関わりの中で、どのような位置にあるものかを、仮説を交えつつ検討してきた。本章ではそれらをふまえて、坪川家に「海彦」のテキストが残された事情について考察していきたい。もともと、現時点では仁吉(三郎)あるいは坪川家周辺の人々が、「海彦」に関して言及した他の史料を見出せない以上、その事情を直接的に導き出すことはできない。しかし、他のアマビコや予言獣に関するテキストの文脈と比較し、坪川家を取り巻く状況を総合的に考察することで、その手がかりの一端は掴めるのではないだろうか。詳しい考察については稿を改める必要があるが、本章では今後の見通しとなる論点を二点指摘しておきたい。

(一) 情報としてのアマビコ

なぜ「海彦」が坪川家文書に残されている

のか。ここでは「海彦」の出現情報や言説、図像が、一つの「情報」として坪川家に伝えられた場合を想定してみよう。

近世社会とりわけ天保期から近代初頭にかけての時期は、武家や公家、都市の商人らが、様々な手段で政治情報や風聞、社会的事件に関する情報等を蒐集・記録したことはよく知られている。こうした動きに農村の豪農層や在村知識人らも無縁であったわけではない。近年、近世社会における情報の問題を扱った研究の中で、各地の豪農層や在村知識人の情報活動に関する研究が盛んに行われており、特に「政治情報」を中心とした情報の収集・伝達のルートの解明等が主題となっている。^⑧

越前国種池村にあった豪農坪川家も、幕末期、情報と積極的に関わりあっていたと言える。武兵衛、仁吉(三郎)兄弟は非常に筆まめで、数多くの書き物を残している。特に兄武兵衛は家の経営のみならず家や村の生活に関する事、人々の出入り、藩や中央政局に関する伝聞等を事細かに記録しており、その日記の一部が『福井市史』に収載されている。そこには前福井藩主松平春嶽^⑨や隣国加賀藩主

前田慶寧⁽⁶⁴⁾の上洛・帰国に関する記事が載せられる一方で、永平寺参詣のため海路三国湊にやってきたアメリカ人のことや、金津駅と府中に泊まった「渡人」のこと等も記されており、武兵衛が坪川家や村内の事にとどまらないう、広い範囲での多様な情報に関心を寄せていたことが窺える。また、いつ入手されたものか定かではないが、坪川家文書には「海陸御固泰平鑑^{おかみんたいへいかがみ}」と題された摺物も残されている。これは「御固瓦版」と総称される江戸内海（東京湾）の海防に関するもので、ペリー来航により防備が強化された嘉永六年末から七年初頭にかけてのもの⁽⁶⁷⁾と推定される。武兵衛が意欲的に政治情報を蒐集していたことの現われと見てよいだろう。

一方、この頃の人々が、この様な政治情報にしか興味がなかったのかという点、無論そうではない。当時の人々も異事奇聞や街談巷説の類が随分と好きだったようで、『日本随筆大成』をはじめとする各種随筆叢書には多くの世間咄が書きとどめられており、『武江年表』『撰陽奇観』といった雑多な情報を編年体で記した書籍も刊行されている。また大田

南畝『半日閑話』の明和九（一七七二）年四月の記事には「此節有馬中務殿の臣物頭安部郡兵衛、怪敷獸を鉄砲にて打しと云浮説有。其凶などを板行し読売等をうる」とあるように、妖怪、幻獸の出現情報を伝える摺物が「読売（摺物の売り）」によって売られていた様子も伝えられている⁽⁶⁸⁾。

では、坪川氏は政治情報や世間咄、異事奇聞など多種多様な情報をどのようなルートで入手していたのであろうか。太田富康氏は研究史を踏まえた上で、地方豪農商層や在村知識人の情報入手ルートには①学者・文化人と②領主家中や役所③商人流通ルートによる商人・運送業者④親類・縁者・使用人⑤町民・村民等⑥武者・修験者等の遍歴者⑦かわら版等の出版物⑧触・達等の公的伝達、の八つがあった、とまとめている⁽⁶⁹⁾。坪川氏にとって、笹谷村の渡部氏が④であり①でもあった点は第一章で紹介したとおりだが、渡部氏経由で坪川家に入ってきた情報―特に書籍を介した―は大きな割合を占めたと考えられる。頻繁な往来の中で、坪川兄弟が渡部氏の蔵書に触れる機会も度々あったらしく、慶応

三（一八六七）年「卯年帳」には「笹谷村渡部氏江書類虫干手伝ニ行申候⁽⁷⁰⁾」とあるように、渡部家の曝書を手伝う記事も見出せる。実際、『越前国主記』をはじめとする多種多様な写本の大部分は、渡部氏から借りて写したものだっただけでなく、先にみたとおりである。

写本も含め、情報を入手し記載する手段の一つに「転写」という行為があったことは、アマビコをはじめとする予言獣の問題を考える上で見逃せない。むろん口伝えによる「うわさ話」「伝話」を記載するという行為も手段としては想定されるが、アマビコを考える場合には、とりわけ「転写」の行為が重要な意味を持つと考えられる。というのもアマビコの教示する除災方法のうち五例に、「写す（書き記す）」という行為が含まれており、間接的に「転写」行為を介在して「見る」「張り置く」ことを要請する場合も見られるためである。元禄享保期から、ニユース文書（紙に記された情報）を転写するという行為が一部で流行しており、この行為が人々のリテラシーの向上、社会の複雑化に伴い漸次量的質的に発達していったことは平井隆太郎氏の指摘にある

とおりである。また村への商品経済の浸透およびそれへの対応として寺子屋が普及した結果、一九世紀には文字を知る村の住民が一段と増加したとの指摘もある。²⁷種池村の坪川兄弟も、その履歴を見ると、嘉永年中は筆道を川野瀬兵衛に、嘉永安政期には読書を戸田一庵に、安政年中には筆を今村徳右衛門に学んだとあり、二人は驚くべき量のあらゆる種類²⁸のものを転写している。「海彦」の情報もこのような中で転写されたものと考えられる。

ここで「海彦」の言葉を振り返ってみよう。

「我が形の繪圖を見たる人ハ死をのかる、」とあり、本来この情報が絵と密接なつながりを持つものであったこと、また更に踏み込んで言えば、「海彦」の情報そのものが「繪圖」として流通していたものと推測できる。絵の下には念入りに「海彦之形」と記され、「天保十五年辰春」という年代表記があることからも、「海彦」の情報は、もとは摺物の形で流通していたと考えられないだろうか。つまり、出現と言説に関する情報を聞き伝え、絵を書き加えたのではなく、元から文字と絵がセットになった摺物（あるいはその写し）の

情報を転写したと考えられるのである。このことは、「海彦」の絵に、手本により似せて描くための跡とも見られる数箇所²⁹の修正跡があることから傍証されるだろう。

湯本氏は、弘化三年の摺物「アマビエ」を、「アマビコ」情報を転写する際、「コ」を「エ」と誤ったもの、と推断している。³⁰とすれば、この摺物に先行する情報で「アマビコ」と片仮名で書かれたもの、あるいは漢字に「アマビコ」というルビが振られたものが存在していたはずである（仮に漢字だけで「尼彦」と書かれていたものが先にあっても、これを「アマビエ」と書き誤るとは考えられない）。摺物には「役人より江戸え申来ル写」とあることから、役人の報告書に「アマビコ」という片仮名表記があったとも考えられるが、一方で奇談怪説などの虚報の流布が公文書³¹の形式を借りたものが多かった、との指摘もある。³²おそらく「役人云々」の箇所は、虚報に信憑性を持たせるための作為であり、本当は役人からの報告など存在しなかったであろう。つまりは「アマビエ」の摺物に先行する「アマビコ」と書かれた別の摺物があったと考え

てよいであろう。明治の新聞に出てくるアマビコの多くにはルビが振られるが、それ以外のアマビコ史料で片仮名ルビのあるものは「海彦」だけである。おそらく仁吉が記した「海彦」情報は、元は年代表記のある摺物として存在していたに違いない。非公式な摺物の大部分が、筆写による流通に頼っていた、という指摘もあるように、仁吉も「海彦」の摺物またはその写しを、どの時点においてか、転写したのである。坪川兄弟が好んで摺物を転写していたことは、幕末から明治にかけて作成されたと思しき一冊の帳面からも窺える。それは嘉永五年の摺物「鎌倉英勇鑑」の写しに始まり、同年「国高改足利勇士鑑」、天保十一年の「豊臣勇士鑑」「三ヶ津大相撲故実由来書」「當時常釜浪華持丸三幅對名字附」「楠正成一紙家訓」「大日本瀧づくし」「庖丁里山海見立角力」など数十の摺物を実に丁寧³³に転写している。坪川氏はどこからか摺物を借り、ある時期盛んに写していたらしい。では、何のために「海彦」は転写されたのだろうか。

(二) 病除けとしてのアマビコ

小野秀雄氏は「アマビエ」を「興味本位の

「瓦版」として紹介しているが、「珍談奇談」を伝えるニュースとしての捉え方以上の評価はしていない。しかし摺物としてのアマビコは、「興味本位」に「珍談奇談」を伝えるためだけに作成されたものだったのだろうか。

平井氏は、かわら版が庶民に買い求められた理由として、単なるニュース価値の他に実用的な価値を備えていたことを指摘し、「お守りとしてのかわら版」という一類型を提示している⁽⁷⁸⁾。悪疫流行の予言と除災方法を伝えるというニュース価値、それに加え媒体自体が災厄除けの護符になるという実用価値を併せ持つものだったため、「託宣型」の摺物が制作され買い求められた、というのである。今度は「託宣・予言する幻獣」Ⅱ「海彦」が病除けのお守りとして転写された場合を想定してみよう。

前近代社会の医療は、医師だけではなく様々な宗教者や人々の経験療法によって成り立っていたため、医療と呪術とは明確に分別できるものではなかった⁽⁷⁹⁾。また、病を神仏の祟りや妖怪変化、疫病神の仕業とする疫神観念も広く浸透しており、特に疫病（はやり病

・伝染病）に対しては、様々な対抗呪術が施されていた⁽⁸⁰⁾。とりわけ「お役三病」とも呼ばれる通過儀礼的な疫病のうち、疱瘡（天然痘）と麻疹は死亡率の高い病気でもあったため、いかに軽くすませるかが人々にとつて大きな関心事であった。そのため、疫神送りや疱瘡神の詫び証文⁽⁸¹⁾、疫神退散令状、越前湯尾峠の孫嫡子など、予防と平癒のための各種の呪い⁽⁸²⁾が行われた。このうち本稿の主題との関わりから、疱瘡絵と麻疹絵に注目してみたい。

一八世紀末頃から出回りはじめた疱瘡絵は、赤刷・紅摺絵とも呼ばれるように赤一色に摺られたものであり、一方の麻疹絵はほとんどが文久二（一八六二）年の麻疹大流行時に版行された多色摺の錦絵である。いずれも達磨、みみずく、春駒や多羅葉、飼馬桶、房楊枝など連想系の図柄を描き、また鎮西八郎為朝、鐘馗や神農、麦殿大明神など英雄・神明系の図柄を描く⁽⁸³⁾。絵の内容を圖像学的・象徴論的に考察したH・O・ロータムンド氏によれば、両者の機能の間に相違はある⁽⁸⁴⁾というが、いずれにせよ色彩的特徴や図像、讃（呪歌）などが、目で視る護符としての機能を果

たしていた。貼り置かれたり、持ち歩かれたりした絵が護符（まじない絵）として機能するという民俗の淵源は、元禄期に流行した大津絵にまで遡ることができると言われている⁽⁸⁵⁾。

また、目で見る病除け護符は疱瘡絵・麻疹絵の系統にとどまらない広範な広がりを見せていた。近世後期の動物見世物（ゾウ、ラクダ、アザラシなど）は、現場で「見る」ことにより、悪病払いや疫病除けのご利益に与ることができ「眼福」が本質だったとされる⁽⁸⁶⁾が、この眼福は霊獣、聖獣、神獣を描いた見世物の引札を「見る」ことでも得ることができた⁽⁸⁷⁾。例えば文政七（一八二四）年に江戸にやってきたラクダの見世物引札には「小児此図を粘おきて常に見る時ハ痘瘡麻疹をかくし悪魔をさるの妙あり」という文言が見え、雷除けにもなることが記される⁽⁸⁸⁾。同じく寛政二（一七九〇）年大坂に来た「駝鳥之図（ヒクイドリ）」や天保一二（一八四一）年浅草での「うさぎ馬（ロバ）」の見世物引札にも疱瘡や麻疹除けの文言が見られる。こうした実在の霊獣の引札と同列に、幻獣の摺物も出回っ

ていた。文化二(一八〇五)年五月越中で撃ちとめられたとされる「人魚」の図には「寿命長久し悪事災難をのがれ一生仕合よく福徳幸を得る」との眼福のご利益が記され、

天保七(一八三六)年丹後に出現したという「一件」の摺物にも「此絵圖を張置バ家内はんしやうして厄病をうけず一切の禍をまぬがれ大豊年となる誠二めて度獸なり」とあり、天保一〇年に売られていた「はうねん龜」の摺物にも「悪病よけの守」と記されている。以上、三例の幻獸・妖怪は予言をしてはいないが、ここまで来れば予言獸の摺物との間にさして大きな差異はない。

アマビコ九例のうち実際に病除けとして流通していたことが確実なものとして明治一五年の二例が挙げられる。『読売新聞』八月三〇日の記事が伝える「市中の繪草紙屋」で「コレラ病除けの守り」として売られていた「三本足の猿の像」と「老人の面に鳥の足の付いたゑたいの分らぬ繪」とが、それぞれ「あま彦」「尼彦入道」にあたることは先述の通りである。このうち「あま彦」の摺物は、同年七月一〇日の『郵便報知新聞』に「安政五年初

めて江戸にコロリと稱する悪疫流行の際何者か此畫像を印刷して高聲に市街を呼歩き多くの利を得しと同様の物にて文言の一字も相違せぬ」とあり、安政五(一八五八)年のコレラ流行時に売られた摺物と同一のものであるという。わが国におけるコレラの第一次流行は西日本を中心とする文政五(一八二二)年のことであり、第二次が安政五年、ついで文久二(一八六二)年、同三年、以後は明治一〇年から同二八年まで数年おきに流行しており、その高い致死率から「コロリ(と死ぬ)」とも呼ばれて恐れられたが、疱瘡や麻疹などと同じく、様々な対抗呪法が行われた。当然ながら元号が明治に改元されたからといって、前近代の医・呪の融合状態を脱し切っていたわけではなく、明治一〇〜一五年にかけての新聞各紙には前近代的觀念によって惹起されたコレラ騒動の記事が散見される。明治一五年のコレラ除け(「あま彦」と「尼彦入道」)もこの文脈で捉えるべきであろう。また直接コレラとの関係は明記しないが、明治九年「長野新聞」の「尼彦(新聞)」は「劇烈の難病」を免れるために諸人が銘々に形容を転写した

といい、明治初期「尼彦(肉筆)」も「流行病」の予言をしており、コレラとの関連性が示唆される。病気の流行を予言した五例のうち、残る一例「アマビエ」とコレラとの関係は不明だが、いずれもが除災方法として教示する「見る」貼置」という行為が、先に見た疱瘡・麻疹絵や見世物引札と同根の習俗にあることは確かである。

一方、病除けに限らず、災難全般や悪魔除けとしてもアマビコの図像は用いられていた。「天日子尊」の図像は、七年間の凶作と人口の半減という災難を免れるために、転写されて家々の入口に貼り付けられたものであったし、「天彦」の図像は明治一四年一月の「世界一變」の天災を転じて「安樂長久の基」とするために一枚五銭で売られた摺物だった。また明治一〇年西南戦争以前の東北地方では、西郷隆盛によって「悪魔除け」の「天彦入道」の図像が貼らされたという話が残されている。

では、このような病除けや災難除けの呪符はどのような伝播ルートで広まっていったのか。まず考えられるのが、前近代社会で医療

の一端を担ったとされる多様な宗教者の存在である。「天日子尊」を伝える『東京日日新聞』の記事は「何れ坊主・か山伏・どももの云ひ出したる事と思へれます角・大師熊野牛王などの類も昔し斯なことから云ひ觸した物と見えます」と、情報や絵図の流布に宗教者が関与した可能性を指摘している。次に考えるべきはメディアの存在である。幕末期に病除けの摺物や錦絵が多く版行された背景に、江戸中期以降の浮世絵の流行や版画技術の向上、出版文化の隆盛などがあつたことが指摘されている。近代社会に誕生したマスメディア^⑩新聞の役割も大きい。予言獣の出現や言説およびその絵を呪符として用いるという効能を、肯定的に伝えた新聞記事はもろろんのこと、それを否定的に伝える記事でも、一旦文字として表されることで、記事の文脈とは切り離された情報の核の部分のみが一人歩きをしてみよう。一九世紀というメディア時代の幕開けと、予言獣の出現時期が重なっていることも領けよう。そして最後に、伝播を担った層として知識人層をあげておこう。横田冬彦氏によれば、「智徳」によって村落内へゲモノ

を保障されていた庄屋層（豪農層）は、医者や医書のもたらす知によって、呪術的民間医療と対峙し、文明的医療を進める役割を担ったとされる。実際、豪農坪川氏の蔵書にも、『名医方鑑（合類医学節用）』（元禄一〇年）、『医療日用指南』（享保一年）、『解体説約』（明治三年）などの医書が含まれており、親類渡部氏は上方で医学を修めてきている。従つて坪川氏は、本来ならば予言獣による呪符などに対峙する側にあつた筈である。しかし一方で、疫神の詫び証文の伝播について考察した寺沢一人氏は、修験や神職などの宗教者が流布させた詫び証文は、受け手の村役人層が文字に親しんだ人々であつたために、それが書き写されて更なる伝播を見せたと論じている。護符としても機能したアマビコ情報も、まずその情報を入手できるだけの情報や知のネットワークを持ち、それを書き写す能力を持つ層にしか伝播させることはできなかつたのである。単なる噂話が口頭で伝播していく過程では、口伝による情報ネットワークさえあれば、リテラシーは必ずしも必要とされない。しかし文と絵がセットになつた噂話

が書き写されたり、購入されたりして伝播していくためには、一定の地位や能力が求められるのである。ここで先にみた文化一一年、三猿の流言の除災方法を思い起こしてみたい。予言の内容は「海彦」と同じであつたが、その除災方法は特に読み書き能力を必要としない正月儀礼であつた。それが約三〇年経ち、絵を写したり字を読み書きしたり、或いは摺物を買つたりすることを前提とした「見る」方法へと除災方法は推移していった。単純に方法が入れ替つたと見ることは適当ではないかもしれないが、リテラシーの高まりにより、別の習俗と三猿の予言とが集合していつたと見ることはできるであろう。最後に坪川氏固有の関心や事情についてもわかる範囲でみておきたい。まず、仁吉らの父武兵衛が安政五年六月一四日に病死しているが、この年がコレラの第二次流行にあたることは偶然であろうか。また、坪川家文書にある明治一〇年代の帳面に挟まれた反故紙には、東京新聞から写し取つたものとして「御神話悪病除」と題した記事が転写されている。そこには「皇国の人々寇奈須虎靈等病今

吹返須伊勢ノ神風」という和歌、ついで「是を朝日の方へ向三へん唱へて沖の方へつよく吹くべし」という使用法が記されている。そしてまた「吹計婆散利拂へ波退具塵埃コ離病和消テ我等安穩」という和歌、使用法として「此御詠を唱へ旭を呑み込へし」という文言も続けて記されている。坪川氏がコレラとそれへの對抗呪法に関心があったことが明らかであるが、残念なことにこれらの呪法が実際に使用された痕跡は残されていない。「海彦」は『越前国主記』という疫病とも災難とも全く無関係の書籍に綴じ込まれたものであり、貼り付けられたり、持ち歩かれたりした形跡も全く見られない。坪川家文書に残された日記や反故紙を更に詳しく調査することで、新たな発見があるのかもしれないが、今後の課題としておきたい。

四、まとめと課題

本稿では、天保一五年の年代表記のある「海彦」を、現在確認できる最も古いアマビコ史料として位置づけ、これまで紹介されてきたアマビコ史料と比較した。その結果、形態面

の特徴として、三本足である点は従来の指摘どおりであるが、その他の点では他のアマビコと合致する点が少なく、「神社姫」や人魚の影響もあまり感じられない点に注目した。次に名称については、海との関連性から、アマビコが本来「海」の字を用いるものであり、「厄」や「天」は後に文飾として用いられるようになったという仮説を提示した。また出現地に具体的地名を記さず、単に「越後国」だけ表記している点にも、情報の原初性を見出した。予言獣としての性格を特徴付ける言説内容については、非常に簡易な内容であり、話が発達する前の原初性がうかがえるが、先行する予言獣の言説との間に類似点も見られ、文政期頃からの流行の中に位置づけることができた。また、文化一一年頃に流行した三猿による予言の影響が、アマビコに猿的な要素を与えているという仮説を提示した。

なお「海彦」が豪農坪川家に書き残された明確な事情については不明だが、奇談を伝える情報として、あるいは病氣・災難除けとして書き残された可能性を指摘した。また坪川

氏によって転写された「海彦」が、元は摺物の形で流通していた可能性にも触れた。

一方、新たな課題や言及できなかった問題も多い。まず形態面ではアマビコを含めた予言獣が、なぜ「光る」のかについて全く言及していない。次に名称について、アマビコが本質として「海」彦であったと推測しながらも、山の猿の影響を受けているとした点には明らかな矛盾がある。もちろん幻獣である以上、理路整然とした説明ができるとは限らないのだが、名称「アマ」に込められた意味を更に追求していく必要があるだろう。また「海彦」には発見者は登場しないが、アマビコや他の幻獣を発見したとされる柴田（芝田）氏は、話の誕生や変容を考える上での重要参考人である。最後に、なぜ文政期頃から明治初頭にかけて、予言獣の話が流行したのかが大きな課題として残された。災害や飢饉、疫病の流行などを含めた「世直し」状況の文脈で捉える必要があるのかもしれないが、単純に社会不安や終末観があったためとする安易な答えは避けたい。いずれも今後の課題である。

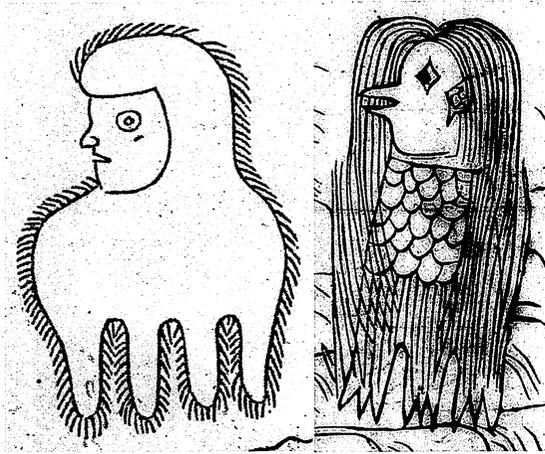


図5 「天日子尊」

図3 「アマビエ」



図6 「尼彦 (摺物)」

図4 「尼彦 (新聞)」

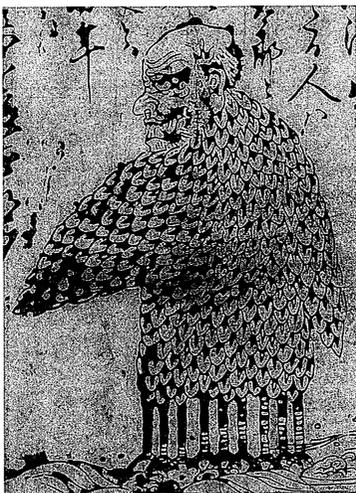


図7 「尼彦入道 (摺物)」



図2 「海彦」

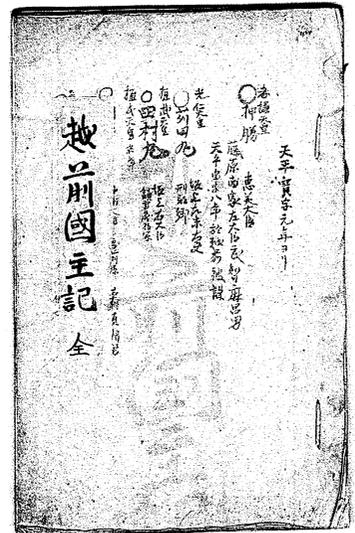


図1 坪川本「越前國主記」

原本所蔵者

図1・2:福井県立図書館

図3:京都大学附属図書館

図6・7:湯本豪一氏

無断転載を禁ず

表一 アマビコの説比較

名	称	図	像	(a) 作物の豊凶の予言		(b) 病気流行・大量死の予言		(c) 除災方法の教示
				いつ	豊凶	いつ	(b1)病気流行 (b2)大量死	
1	海彦 (肉筆/坪川本) 天保15 (1844)				豊凶	いつ	(b1)病気流行 (b2)大量死	我が形の繪圖を見たる人へ 死をのかる、
2	アマビエ (摺物/京大蔵) 弘化3 (1846)			諸国豊作		豊凶	(b1)病気流行 (b2)大量死	早々私ヲ写シ人々ニ見セ候 得
3	あま彦 (摺物/郵便報知新聞) 安政5 (1858) 明治15 (1882)			豊作		豊凶	(b1)病気流行 (b2)大量死	然れども我等の姿をかまし るすものは病氣にあはず此 事よく諸國へ相ふれ候様
4	尼彦 (肉筆) (肉筆/個人蔵) 明治初 (1871-)			豊作		豊凶	(b1)病気流行 (b2)大量死	我が姿座前に貼置かば必ず 其病難を免るべし此を人々 にしらしめ
5	天日子尊 (肉筆/東京日日新聞) 明治8 (1875)			豊作		豊凶	(b1)病気流行 (b2)大量死	我がこの影像を寫して家ごと に貼り置き朝夕我を敬まひ導みて 祭るべし、左様すれば七年の災 難を免かる、事あるべし
6	尼彦 (新聞) (肉筆/長野新聞) 明治9? (1876)			豊年	當村に於て 凶作う つき	いつ	(b1)病気流行 (b2)大量死	我が形容を寫して朝夕見る ものは此病症を免れん
7	天彦 (摺物?/東京曙新聞) 明治14 (1881)			豊年		いつ	(b1)病気流行 (b2)大量死	我が像を寫して軒毎に張り 置かば天災却て安樂長久の 基おとならん (努々疑ふこ となかれ)
8	尼彦入道 (摺物) (摺物/個人蔵) 明治15 (1882)			大豊年		いつ	(b1)病気流行 (b2)大量死	此入道の姿を張置朝夕見る 時ハ其大難をののかす

表二 その他の予言獣の言説比較

	名称	(a) 作物の豊凶の予言		(b) 病気流行・大量死の予言		(c) 除災方法の教示	
		いつ	豊凶	いつ	(b1) 病気流行		(b2) 大量死
1	亀女(古図)(摺物?) 寛文9(1669)	五ヶ年の間	豊年		悪風邪はやりて	人多く死せり	我姿を画て見せなましをのがるべし
2	神社姫(摺物) 文政2(1819)	當年より七ヶ年	豊年	此節又	コロリといふ病流行す		我姿を畫に寫して見せしむべし。其病をまぬかれ長壽ならしむる
3	人獣【くだべ?】 (肉筆?) 文政10(1827)			當年より四五五年の内に	名も知れぬ悪病流行して	老若ともに人多く死する	此圖を畫きて常に見る時は其病を避るなり(ゆめゆめ疑ふべからず)
4	クタヘ(肉筆) 文政10(1827)か			此四五五年の内	何ともワからぬ病流行て	男女老若なやミで難しうすへし	わか姿を一度ミれば其難のかるへし/ワかすかたを繪圖にかきとり諸人ニミせ申へしかならず難へからず
5	どだく(肉筆?) 文政11(1828)			是より	病気はやりて	死する者多くあらん	我姿繪を常に見る人は、其難、除かん(→是を画て張置人多し/繪図はやる)
6	クタベ(肉筆?) 文政12(1829)			今年よりしつ三五年の間	名もなきえしれぬ病流行して	草根木皮も其効なく、扁鵲、倉公も其術を失ふべし	我が肖像を図寫して、一度これを見ん輩は、必ず其災難を免るべし
7	猿郷(摺物) 年不詳(文政期か)			當年より四五歳之内	名も無病二而	人多死す	常ニ我形圖を見たるものハ右乃病難をのがれ却て長壽すべきもの也
8	スカ尻(摺物) 年不詳(文政期か)			今年方四五五年の内に	名もなきおなら流行	いもべの薬にててもゆかず手にあせにぎりべさいごべの事有	我姿青ひ顔を繪圖にうつしはりおかわ其難をのがれ家内まめべくそくさい延命うたがひなし
9	人魚(摺物?) 嘉永2(1849)	當年方五ヶ年之間	何国ともなく豊年	十一月頃より	流行病二て	人六分通り死す	我形を見る者又ハ画を伝へ見るものハ、其憂ひを免るべし早々世上に告知らしむべし
10	光物(肉筆) 嘉永2(1849)	當年より五ヶ年之間	豊年	当十一月之頃より	風病流行	世上ノ人凡六分通り死す	我圖ヲ常に見其難ヲ避候也早く世上ノ人ニ物語シ
11	比叡山に怪しげな光(摺物) 嘉永7(1854)			當年	火事水なん毒風国々所々に流行		このなんたすけん為二つくる也神社祭るへし又ハ我姿家ニはり置へし一度我姿みたる物さいなんのがるへし(うたかふ事あるべからず)
12	竹駒大明神之神主の娘(摺物) 安政5(1858)			今年	至てあやしきやまい流行いたし(三コロリ)	当たりたる人は一人も助る事なし	我姿を能々見置繪二うつし諸人ニ知らしめよ我姿画一度見る人ハはやり病のうれひをのがれ無病息才なり
13	件(錦繪) 慶応3(1867)	當年より	諸国種なる豊作なり	孟秋のころに至り	悪しき病流行する		【必ず銘々に求め給ひて家の内に張置厄病の難を除き給へり】
14	アリエ(肉筆) 明治9(1876)	當年より六ヶ年之間	豊作打続く	當六月より	先年流行せしコロリの如き病氣流行して	世の人六分通り死失べし	能く此の災難を避んには、身共が姿容を圖し置て朝な夕な信心し玉ひかし
15	光り物(摺物) 年不詳	當年より五ヶ年之間	豊年	求ル十二月ヨリ	あく風吹来り	世の人々六分通り死候	我姿ヲ朝夕見れば右の難をまぬかるへし
16	山童(肉筆) 年不詳	當年方五ヶ年之間	五穀よく実のりて豊年		悪き病ひ流行して	人多く死ス	あらかしめ我等か形ちを写し是を見るもの右之憂を除き却て長壽を得へし(疑ふ事なかれ)
17	大平山の天狗(摺物) 年不詳(近世?)	當年方七ヶ年之間	万作豊年	七ヶ年間毎月八日夜	北方方悪風ふき来る成此風にあたる人ハ悪ひやうける		我姿を門口にはりおけはさいなんをまぬがれ家内はんじやう火おせなり
18	大神社姫(摺物) 年不詳(近世?)	當年より七ヶ年のあいだ	満作		あく病はやり	人多くしす	わがすかたを見る人ハあく病をまぬがる

- 1. 注39 ●2. 加藤玄龜『我衣』文政2年七月(『日本庶民生活史料集成』第15巻、三一書房、1971年、p409) ●3. 『虚実無尺叢』第4巻(宮武外骨『奇態流行史』半狂堂、1922年、p65) ●4. 個人蔵。「越中国怪獣くだへ」(図版は『日本の幻獣』p48。年代表記はないが『呪いと占い』(川崎市市民ミュージアム、2001年) p34に従う) ●5. 高力種信『猿猴庵日記』文政11年4月(原田信彦編『日本都市生活史料集成4 城下町編2』学習研究社、1976年、p652) ●6. 大郷信斎『道聴塗説』第20編、文政12年春『流行クタベ』(三田村鳶魚編『鼠璞十種』中巻、中央公論社、1978年、p317) ●7・8. 大阪府立中之島図書館蔵(図版は『かわら版・新聞 江戸・明治三百事件』I、p84) ●9. 須藤由蔵『藤岡屋日記』嘉永2酉閏4月中旬(鈴木棠三編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第3巻、三一書房、1988年、p490) ●10. 注41 ●11. 紙の博物館蔵(図版は『かわら版・新聞 江戸・明治三百事件』II、p20) ●12. 東京大学総合図書館蔵(図版は木下・吉見編『ニュースの誕生』p53)。年代表記はないが『摺物DB』に従う ●13. 個人蔵(図版は『日本の幻獣』p48)。年代表記はないが、石井研堂『増補改版錦絵の改印の考証—一名錦絵の発行年代推定法—』芸艸堂、1994年)の記述に従う ●14. 注44 ●15. 注40 ●16. 注43 ●17. 個人蔵(図版は湯本『明治妖怪新聞』口絵、『日本の幻獣』p27を参照) ●18. 個人蔵(図版は『日本の幻獣』p29を参照)。

「アマビコ史料」

史料2 「アマビエ」(「肥後国海中の怪」)

原本 京都大学附属図書館新聞文庫蔵
肥後国海中え毎夜光物出ル所之役人行見る二
づの如の者現ス私ハ海中ニ住アマビエト申者
也當年より六ヶ年之間諸国豊作也併病流行
早々私ヲ写シ人々ニ見セ候得と申て海中へ入
けり右ハ写シ役人より江戸え申来ル写也

弘化三年四月中旬 (図3)

史料3 「あま彦」

『郵便報知新聞』明治一五年七月一〇日号
本所外手町四十二番地の伊澤まさといふ後家
が御苦勞にも三四日跡より町内ハいふに及ハ
ず隣町までを走り廻り軒別に虎列刺除を差上
げますと配り歩きし半紙四切ほどの刷物を見
ると下にハ猿に似たる三本足の怪獸を描き其
上に平假名を以て「肥後國熊本御領分眞字郡
と申處に光り物夜なく出て猿の聲にて人を
呼ぶ同家中柴田五郎右衛門と申者見届候處我
等ハ海中に住むあま彦と申者なり當年より六
ヶ年間豊作しかなながら諸國病多く人間六分

死す然れども我等の姿をかきしるすものは病
氣にあはず此事よく諸國へ相ふれ候様申置き
何處ともなくうせにけり」と記せり是れ安政
五年初めて江戸にコロリと稱する悪疫流行の
際何者か、此畫像を印刷して高聲に市街を呼
歩き多くの利を得しと同様の物にて文言の一
字も相違せぬを以て見れば此婆さんが古市
着の中から見付け出せしま、人助けとか後世
の功德の爲めとかいふ量見にて其儘を翻刻
して配りしものならんが今時ハ此様な事にて
安心する人ハござらぬ

史料4 「尼彦(肉筆)」 原本 湯本豪一氏蔵

肥後國熊本縣御領分眞字郡ト申所に毎夜く
猿の聲して人を呼ぶ同所に柴田彦左衛門と申
人間届の所我ハ海中に住む尼彦ト申者なり偕
告るに本年より向ふ六ヶ年豊作なるも諸國に
流行病多し人間六分通り死申候然レトモ我が
姿座前に貼置かバ必ず其病難を免るべく候故
に此を人々にしらしめとて遂に何處方とも無
く失せたりけり (図6)

史料5 「天日子尊」

『東京日日新聞』明治八年八月一四日号
去る五日に或る人が越後のくに湯澤驛を通ッ
て見ますと家ごとに斯な図を紙に書いて入口の
邊に貼り付けてあるから餘り見なれぬことゆ
ゑ處の者に問ひたるに是は天日子尊のお姿な
りと云ふ猶その訣を聞に三十日ほど前に此邊
の田の中にて人を呼ぶ者あり是を見れば異形
にして恐るべきが如くなれば誰も側へ依る者
もなかりしに或る士体の人此處へ通りか、り
て彼の聲に應じ側に立寄りたるに彼の異形の
者の云く我ハ天日子尊なり今此處に出現した
る次第ハ當村に於て是より七ヶ年の間凶作う
ちつゞき人口追ひくに減じて今の半分に至
らんとす予これを憐れみて諸人に告げ知らせ
我がこの影像を寫して家ごとに貼り置き朝夕
我を敬まひ尊みて祭るべしし様すれば七年の
災難を免かる、事あるべしと宣ひしに依て此
圖を軒別に張り付けますと語れりとぞ山中の
愚民とハ云ひながら餘りばかしくしき事なれ
バとて報せられましたが何れ坊主か山伏ども
の云ひ出したる事と思はれます角大師熊野牛
王などの類も昔し斯なことから云ひ觸した物
と見えます近ごろも狼様だの鉤舟守だのと云

ふ物が能く貼てあります支那でもいろ／＼の神様の靈符が家々に貼付けてありますすが彼レが日本の神道者の元祖で五座りませう(図5)

史料6 「尼彦(新聞)」

『長野新聞』明治九年六月二二日号
茲に肥後の國青沼郡磯野濱にて毎夜人を呼びあるへは其身より光りをはなちなと其おそろしき形容に諸人おの、きおそれて近付ものなし然るに舊熊本藩士芝田忠太郎といふ人が通りか、ツて何者なりやと問しに彼の怪物が答に我れは海中にて司執る尼彦といふものなるが本年より六ヶ年の間だは豊年なれども當年は國に中劇烈の難病が流行て六分通りも人が死するなり依て我が形容を寫して朝夕見るものは此病症を免れん此事を告んため毎夜この所へ上りて待ち居たるなりと言しに付諸人尼彦入道と號け銘々此の形容をうつして持居るが諸新聞にも出であるといふ風聞だが本統かとある方より圖をそへて送られましたから、その圖面を記載してお目にかけますが記者は斯ナことは決して知りませんし諸新聞に

も出てハないがしかし不開化の諸人方には誠に困り升箇様なものを寫して見るより諸新聞を見て身の養生を能くおやりなさい(図4)

史料7 「天彦(新聞)」

『東京曙新聞』明治一四年一〇月二〇日号
葛西金町の豪農坂倉某方へ一兩日前三人連の男が怪しき圖をかきしを數枚携へいたりてこハ天保年間西海の沖に毎夜光りを發せし異形の怪物現ハれ我ハ海中に住みて天部の諸神に仕ゆる天彦と申すものなり今より三十餘年の後ち世界消滅する期にいたり人種悉く天災に罹りて尽ることあらん其時我が像を寫して軒毎に張り置かば天災却て安樂長久の基おとならん努々疑ふことなかれと誓ふて形ちハ失せたり此事今回噂さ高き來る十一月にハ世界一變するといふ説に符合すれば彼の天彦の御影を寫し全國一般へ頒布せんと思へど毎手持廻りてハいたづらに日を費やすことなれば當村ハ貴家にて引受け村中の者へ此由を傳へ分與せられたし但し一枚五錢の定價なり何百枚渡しなバ村中の戸數に適當するやと語りければ坂倉ハかかることハ郡役所へ出て願は

る、か又た戸長の宅も近ければそれへ協議の上宜しく取引あるべしといふにイヤ目下の郡長戸長等ハ兎角開化めかしてかやうなことハ悟らず妄説杯といひ破る者多ければ由緒正しき貴家へ依頼するなりと只管云ひ張りて去らざれば持あまして僅かに七八枚を買ひうけ逐ひ歸せしとぞ此でんにて欺き歩行くハこゝのみに限らず府下近村にていくらもありとのこと早く驅除したきものなり

史料8 「尼彦入道(摺物)」

原本 湯本豪一氏蔵
日向の國イリノ濱沖へ出たる入道也入道を見たる人ハ熊本士族芝田忠太郎と申者也此入道もふす事にハ當年より六ヶ年大豊年也と申事也然ル処當年患病にて日本人(六題)申事也此入道の姿を張置朝夕見る時ハ其大難をのかすと申事也(図7)

史料9 「天彦入道」

寺田傳一郎「八十翁談話」より
西郷合戦に結び付けて不思議な噂さとなつたものは、天彦入道のまじなひである。それは

戦争の前、何年頃であるか、近郷近在一帯の評判となつて天彦入道の像を白紙に描き、これを表裏の戸口に貼れば悪魔除けになると稱し、地藏尊様の形をした入道を墨繪でしたため、争つて貼りつけて災難拂ひをした。

これが西郷合戦が起きると、これはあらかじめ西郷参議が日本國中に、悪魔除けとして貼らしめたものであつたと伝えられたことがある。

〔注記〕

- (1) 現在は特殊受入資料として架蔵されている。
- (2) 松見文庫、一九七七年、二〇九～二六頁。
- (3) なお第二部には、明治以後の注記が幾つか見られる。「基通公」の箇所には「華族近衛祖」という朱書等。
- (4) 『福井市史』資料編9近世七「福井市、一九四四年、八六〇～五頁(以下「市史」と略す)。
- (5) 仁吉(三郎)の記した「坪川家先祖記(仮)」(明治一三年)によると、坪川家の祖北島四郎孝高は、南北朝の動乱期に、新田義貞らと共に後醍醐天皇の二人の皇子を奉じ、教賀金ヶ崎城で北朝方と戦っている。落城後は坂井郡坪江郷に潜居。子孫は朝倉衆に属して一乗谷に住むが、朝倉家滅亡後は種池村に帰農したといふ。
- (6) 『清水町史』下巻(清水町教育委員会、一九七九年)一六〇三～四頁。渡辺紀「丹生郡清水町笹谷区の歴史」(私家版、一九九七年)一

一九～二〇頁。與四郎島勝應は、地租改正時には測量の技能を活かし「天爵大神」と呼ばれる活躍をみせ、後に県会議員や志津村長も勤めている。後継ぎに恵まれず、明治二八年コレラ(赤痢か)で亡くなると、財産は整理されて家は断絶した。

(7) 後々まで親密な関係は保たれ、明治三年には仁吉(三郎)が「嶋渡部家紀附録」という系図まで作成している。

(8) 文久元年「酉年帳」によると、兄の使いとして仁吉が頻繁に渡部家を訪れている。

(9) 目につくだけでも、武兵衛の写本に『越前中納言様御給帳(元治元年)』、『越前国名所記』(慶応二年)、『片鞆(記)』(明治二年)、『朝倉始末記』(明治一五年)、仁吉(三郎)の写本に『越前国各村反別等合計表』(明治一五～一七年)等がある(括弧内は筆写年)。

(10) 『市史』六一～二頁。明治五年の改名は、村内に同苗同名の者がいたため。

(11) 死後の人物評は次の通り。「篤実温厚ニシテ常ニ草履ヲ穿テ莫慮ヲ纏ヒ笠ヲ冠リテ華美ナル服装ヲ為サズ儉素自ラ奉ジテ公共ノ為ニ盡セリ」(木戸正榮編『自治民政資料』大成社、一九一二年、一九六～七頁「足羽郡社村故坪川三郎ノ事績」)。

(12) 第一巻、小学館、二〇〇〇年。

(13) 千葉幹夫編、小学館、一九九五年。

(14) 村上健司編著、毎日新聞社、二〇〇〇年。

(15) 村上「妖怪事典」(二三～二四頁)。

(16) 『明治妖怪新聞』(柏書房、一九九九年)、『地方発明治妖怪ニュース』(柏書房、二〇〇一年)、『妖怪と楽しく遊ぶ本 日本人と妖怪の意外な関係を探る』(KAWADE夢新書)、『河出書房新社、二〇〇二年)、『妖怪あつめ』(怪

books) (角川書店、二〇〇二年)、『江戸の妖怪絵巻』(光文社新書) (光文社、二〇〇三年)、『妖怪百物語絵巻』(国書刊行会、二〇〇三年)等。

(17) 湯本『明治妖怪新聞』一九六～一九八頁。

(18) 小松和彦編『妖怪学大全』(小学館、二〇〇三年)一〇三～一二五頁。

(19) その他「世界の終焉を予言したアマビヒコの謎」

「山の怪と海の怪の見逃せない関係」(湯本『妖怪と楽しく遊ぶ本』一三一～一六六頁、一四五～一五〇頁)、『妖怪「アマビヒ」の謎』(幻

獣売りのいる風景「予言獣アリエの正体」(湯本『妖怪あつめ』一〇〇～三頁、一〇三～八

頁、二二一～四頁)等。

(20) 企画展解説図録「日本の幻獣―未確認生物出現録―」(川崎市市民ミュージアム、二〇〇四年)を参照。

(21) 妖怪学、妖怪研究という学問領域に関しては小松和彦「妖怪と妖怪研究―序論にかえて―」(小松編『妖怪学大全』九～二八頁)を参照。

(22) 常光徹「学校の怪談―口承文芸の研究I」(角川ソフィア文庫) (角川書店、二〇〇二年)所収の「人面犬と件(クダン)の予言」(一五二～一六四頁)は、噂ばなしという観点から、予言する人面獣(人魚や山童等)を取り上げ、「アマビヒ」にも言及している。

(23) 湯本氏が紹介したアマビヒ関係資料の中には、「神社姫」や「山童」「亀女」等、従来アマビヒとは無関係の文脈で既に紹介されていたものもあるが、これらの幻獣を予言獣としてとらえ、図像学的な比較も加えて、アマビヒとの関連を説いた点に特徴がある。

(24) 『日本の幻獣』によれば、「幻獣」の定義は、ひとまず「人々に目撃され記録されてきた

- 不思議な生き物」または「未確認生物」とすることができ。また同書「はじめに」において、湯本氏は「幻獣」と「妖怪」の区別として、後者が「意思や行動の足跡は残すものの、自らが体現してその存在を示すことはない」のに対し、前者の「幻獣」は「生まれ」て「死んだ」証拠を残した「生き物」である点を強調している。
- (25) 湯本「予言する幻獣」は、七例全ての全文翻刻と図版を掲載している。
- (26) 寺田傳一郎「八十翁談話」(旅と伝説)第一〇巻五号、一九三七年。寺田は、秋田県平鹿郡平鹿町の郷土史家で、初代平鹿町長も務めた。現在、蔵書が寺田文庫として、平鹿町立図書館に寄贈されている。
- (27) 本稿でいう「摺物」とは、墨色単色または若干色で摺られた一枚摺、一般的に言うところの「瓦版」の語を使用しないことについては、東京大学史料編纂所「摺物データベース」(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp>)以下、「摺物DB」と略す)の「本目録」(データベース)の性格を参照。
- (28) 原本は京都大学附属図書館新聞文庫蔵。カラー図版は、湯本「明治妖怪新聞」口絵や『日本の幻獣』五〇頁等を参照。なお湯本「妖怪『アマビエ』の正体」によって、「アマビエ」は「アマビコ」の誤記であることが推断されたが、本稿では便宜上、資料の記載どおり「アマビエ」と呼ぶ。
- (29) 湯本「予言する幻獣」一〇六〜七頁。ただし、神社姫の頭には二本の角が生え、口も尖っておらず、体は蛇のように見える。また「神社姫」という名称は、意味・由来が不明瞭だが、「神蛇姫」と表記されることも
- ある(石塚豊芥子編、鈴木棠三校訂「近世庶民生活史料 街談文々集要」三一書房、一九九三年、四六〜七頁)。本来は「蛇」の字を用いていたのではないだろうか。
- (31) 水木しげる「続・妖怪事典」(東京堂書店、一九八四年)一八四〜五頁。
- (32) 原本は湯本豪一氏蔵。カラー図版は「日本の幻獣」五一頁を参照。
- (33) 原本は湯本豪一氏蔵。カラー図版は「日本の幻獣」五〇頁を参照。
- (34) 「日本国語大辞典(第二版)」によると「天彦(あまひこ)」は「日の異称」、「音の反響。こだま。やまびこ。一説に天人。」とある。なお「海彦」と「尼彦入道(摺物)」とは自らの名を告げていないが、残りの六例は「我(我等、私)は〇〇と申すものなり」と自己紹介している。
- (35) 湯本「予言する幻獣」一一二〜一三頁。
- (36) 一方、堀一郎「我が国民間信仰史の研究(一)」(東京創元社、一九五五年、三四七〜八)は、「海浜にあつては海の彼方の水平線は即ち空である。この観念は国語の「アマ」が、一方に天であると共に海をも意味する言葉であった所からも知られる」とし、「海」||「天」に通ずるもの、との指摘をしている。
- (37) 「藤岡屋日記」の嘉永二年閏四月中旬の記事(鈴木棠三編「近世庶民生活史料 藤岡屋日記」第三卷、三一書房、一九八八年、四九〇頁)。
- (38) 「亀女」の錦絵(個人蔵。年代不詳。図版は湯本「予言する幻獣」一〇六頁や「日本の幻獣」五二頁を参照)。本図には寛文九(一六六九)年に佐渡の海に出現した亀女の古図も併記される。
- (39) 「越後国に光り物出て予言する」摺物(原本は国立歴史民俗博物館蔵。年代不詳。図版は「異界万華鏡—あの世・妖怪・占い—」国立歴史民俗博物館、二〇〇一年、一〇六頁を参照)。
- (40) 松嶋喜太郎の風説留「二代記 四五之巻」(金沢大学資料館蔵松嶋家文書)収載、嘉永二年の記事。
- (41) 個人蔵。図版は「日本の幻獣」一九九頁参照。
- (42) 早稲田大学図書館演劇博物館蔵。図版は、湯本「明治妖怪新聞」口絵や「日本の幻獣」五三頁を参照。
- (43) 『甲府日日新聞』明治九年六月一七日号。図版は「日本の幻獣」九八頁を参照。
- (44) 原本は早稲田大学図書館西垣文庫蔵。他に美見は叶わなかつたが、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫にも同名の摺物が二種確認できる(摺物DBによる)。また、一〇月九日「読売新聞」、同一〇日「東京日日新聞」には、これらの摺物の販売が警視庁により差し止められたという記事が掲載されている。
- (45) 湯本氏も「妖怪と楽しく遊ぶ本」の中で「天保年間に、三十数年後の世界消滅を予言したアマビコが出現したという記録を私は知らない。おそらくは、この三人組がでっちあげた話なのだろう」として、天保年間のテクストと見ることに疑義を呈している。
- (46) 「昨今市中の繪草紙屋にてコレラ病除けの守りなり」と三本足の猿の像やまたは老人の面(鳥の足の付いたるたいの分らぬ繪などを發賣するハ愚人を惑し甚だ豫防の妨げに成るにつき此ほど其筋より發賣禁止の儀を警視廳へ達せられましたと」
- (47) 『かわら版・新聞 江戸・明治三百事件(太

若越郷土研究 四十九卷二号

陽コレクショーン) I、II (平凡社、一九八七年、稲垣史生監修『江戸の大変』天の巻(平凡社、一九九五年、木下直之・吉見俊哉編)ニユースの誕生―かわら版と新聞錦絵の情報世界―(東京大学コレクショーン)『東京大学出版会、一九九九年』等。

(49) 「件」関係資料については佐藤健二「クダンの誕生」『流言蜚語―うわさ話を読みとく作法―』(有信堂高文社、一九九五年、一四七―二〇九頁)を参考にした。

(50) テクストを確認できなかったため、表に載せなかったものもある。「きたいの童子」(東京大学総合図書館蔵『摺拾帳』収載)、「白首の鳥」(蓬左文庫蔵『鶏肋集』収載)等。

(51) 湯本氏は「アリエと山童はアマビコと直接的な接点を持つ幻獣」という指摘をしている(予言する幻獣)一一五頁。その根拠として「山童」は三本足であり、「アリエ」が四足アマビコに類似する点、また両者が多くのアマビコ同様「柴田」某に発見されている点を挙げている。

(52) 石塚編『街談文々集要』三二頁。

(53) 三猿については飯田道夫「見ザル聞カザル言ワザル―世界三猿源流考―」(三省堂選書)(三省堂、一九八三年)、庚申信仰と三猿の関係については小花波平六「庚申信仰礼拝対象の変遷」(『庚申信仰(民衆宗教史叢書第一七巻)』雄山閣出版、一九八八年、一四一―一七一頁)を参照。ただし予言する三猿についての他の事例は見出せなかった。

(54) 「明言神猿記」というタイトルの摺物は、摺物DBや諸種目録等では現存を確認できなかった。

(55) 「大和山辺郡荒蒔村宮座中間年代記」(天理市

史(改訂)史料編1『天理市役所、一九七七年、三九五頁。原本荒蒔区有)の文化一一年の記事に「八月悪星出候と沙汰有、又九月頃大坂二年直しとして正月改而致、此日堺とやらにさるが三足出申、一疋之申、申者荒キ年ト申、又一疋申者人が三合ニ成ルト申、又一疋申候者正月ノ内ニすれば能ト云申。」

(56) 『梅園日記』(日本随筆大成)第三期第六巻、日本随筆大成刊行会、一九三〇年、五〇〇―二頁)にも「文化十一年夏のころ、某の國某の山にて孫人の如くものいひけるやうは、こ

とし疫病にて人多く死ぬるさまに、門松たてて、來年の正月になりぬるさまに、門松たて雑煮餅くひなどせば、病をまぬかるべし。といへりて、かの説の如くになしたる人も、いと多かりけり。これ亦前にも有しことなり。」との記載が見られるが、ここでは三猿ではなく単に孫とのみ記される。

(57) 宮田登「天変地異と世直し」(『天変地異と世紀末―日本人の災害観・終末観―』古河歴史博物館、一九九九年)は、「ここで世界は七分通り死滅というが、全てが終末になるとは断定してないところが微妙なのである」とし、これが危機回避世直しにつながるものと評している。

(58) 「三本足」と言えば、熊野の八咫鳥が想起される。本来、記紀に出てくる八咫鳥には三本足という特徴はなかったが、中国の「金鳥」(太陽の中に住み、三本足)の影響を受けたものという(萩原法子『熊野の太陽信仰と三本足の鳥』戎光祥出版、一九九九年)。この鳥に関連して興味深い史料が、平井隆太郎「かわら版の謎をさぐる」に引用されている(『かわら

版・新聞 江戸・明治三百事件(太陽コレク

ション5) I、平凡社、一九八七年、三九―五四頁)。尾張藩士安井重遠の『鶏肋集』(蓬左文庫蔵)に「このたび加賀国白山へ両頭白首の鳥出て人言のごとく云ける。当年、世の人九分死するの難あり、よつて我がかたちを画き日々見るときは難をのがれん、必ず疑ふ事なけれ、こは熊野大権現御告なりとて飛去ぬ」といふ安政四(一八五七)年の摺物が収載されているという。図像を實現していないため、推測するより他ないが、熊野との関わりから鳥が三本足だったとも考えられるが、ここでは紹介するにとどめる。また甲斐國の市川喜左衛門が著した「安政四年二月に加賀国白山に『熊野七社大権現御神武の鳥(図は両頭で片方の頭が白)が現われ、今年八月九月の此世の人九分通死る難有依て我等か姿を朝夕共に仰信心者は必ず其難逃るべし』という予言をしたという」(『甲斐志料集成』卷二、甲斐志料刊行会、一九三五年、三〇七―三二七頁)。

(60) 「取越正月―文献と傳承について―」(『民間傳承』第一三巻第一号、一九四九年)、「取越正月の研究―日本民族信仰の伝承学的考察―」(『人文研究(大阪市立大学文學會)』第三巻第一〇号、一九五二年)。

(61) 杉田玄白「後見草」中「燕石十種」第二巻、中央公論社、一九七九年、一〇七頁)。「宝曆

(59) 「休み日」(『日本民俗大辞典』下巻、吉川弘文館、二〇〇〇年、七二七頁)。

ただし、この鳥の図には、足は二本または四本描かれているように見え、三本足ではない。どちらも「海彦」より後の事例であり、大量予言の割合が九分となっている点に注目したい。

- 九年の夏のころより、誰いひ出せるといふもなく、来る年は十年の辰の年なり、三河万歳のうたへる、みろく十年辰の年にあたり、此年は災難多かるべし、此難をのがれんには、正月のことがきをなすにしくことなしと申ふらしたり、是によりて、雑煮を祝ひ、蓬菜をかざり、都鄙一同の事とはなりぬ。ミロク信仰については宮田登『ミロク信仰の研究』未來社、一九七五年を参照。
- (62) 研究史は、高部淑子「日本近世史における情報」〔『歴史学研究』六三〇、二〇〇二年〕を参照。
- (63) 『市史』七二六―七頁。八月九日、十一月二日。
- (64) 『市史』七二七―八頁。二月二日・一九日。
- (65) 『市史』七七八頁。五月二七日。
- (66) 『市史』七二二頁。七月一八日。
- (67) 齋藤多喜夫「御固瓦版」〔ペリー来航と横浜』横浜開港資料館、二〇〇四年。五二―七頁。
- (68) 『大田南畝全集』第一巻、岩波書店、一九八八年。三五九頁「有馬怪獣」。
- (69) 太田康富「ペリー来航期における農民の黒船情報収集―武蔵国川越藩領名主の場合―」〔『埼玉県立』文書館紀要』五、一九九一年〕。
- (70) 『市史』七二二頁。
- (71) 「江戸時代におけるニュース流布の様相―ニュース文書の転写について―」〔東京大学新聞研究所紀要』二号、一九五三年〕。
- (72) 塚本学「都市文化との交流」〔日本の近世8村の生活文化』中央公論社、一九九二年〕。
- (73) 坪川三郎「坪川家先祖記(仮)」〔明治一三年〕。
- (74) 湯本「妖怪『アマビエ』の正体」。
- (75) 平井「江戸時代におけるニュース流布の様相」八八頁。
- (76) 平井隆太郎「瓦版の文体」〔講座日本語学8文体史Ⅱ』明治書院、一九八二年。一〇六頁。石塚豊芥子も文化二年の「人魚」情報について「此図ハ或人のもとより写したるを、爰に模写す」と、転写による入手であったことを述べている〔『街談文々集要』四七頁〕。
- (77) 「かわら版物語―江戸時代マス・コミの歴史―」〔風俗文化双書』雄山閣出版、一九六〇年。平井「かわら版の謎をさぐる」。他に「演劇の客寄せ」〔見世物興行』忠孝奨励』無事を知らせる」といった類型をあげている。
- (78) 塚本学「民俗の変化と権力―近世日本の医療における―」〔近世再考―地方の視点から―』日本エディタースタール出版部、一九八六年。一四九―一七六頁〕。
- (79) 大島建彦「疫神と福神」〔疫神研究の課題』〔疫神とその周辺』岩崎美術社、一九八五年。大島「疫神とその周辺」、同「疫病神の詠び証文」〔御影史学会編』民俗の歴史的世界』岩田書院、一九九四年。三六一―四〇六頁、時枝務「疫神の詠び証文」をめぐる二・三の問題』〔民具マンスリー』二五巻八号)等を参照。
- (80) 末口龍「湯野尾峠孫嫡子縁起」〔私家版、一九八五年〕、同「越前湯野尾峠孫嫡子文獻集」〔私家版、一九九八年〕、澤博勝・井上智勝「湯野峠茶屋と孫嫡子信仰」〔福井県歴史の道調査報告書第二集』福井県教育委員会、二〇〇二年)等を参照。
- (81) 企画展解説図録「呪いと占い」〔川崎市市民ミュージアム、二〇〇一年〕は、病除けをはじめとする様々な用途、形式のお札やお守り等多くの呪物を紹介している。
- (82) 疱瘡絵・麻疹絵の図版は「錦絵に見る病と祈り―疱瘡・麻疹・虎列刺―」〔町田市立博物館、一九九六年〕、『はやり病の錦絵』〔内藤記念くすり博物館、二〇〇一年〕、『病よ去れ―悪疫と呪術と医術―』〔古河歴史博物館、二〇〇一年〕を参照。
- (83) 「疱瘡絵・麻疹絵に見たる庶民信仰の諸形態」〔錦絵に見る病と祈り』所収)によると、疱瘡絵は不可避な疫病を軽く乗り越える、という消極的な願意の呪物であり、麻疹絵は合理的思考・教訓と呪的なものが混合し、政治への不満、世直しの要素も含むものという。詳しくはH・O・ローテルムンド「疱瘡神」〔岩波書店、一九九五年〕、南和男「文久の「はしか絵」と世相」〔日本歴史』五一二、一九九一年)を参照。
- (84) 川部裕幸「疱瘡絵の文獻的研究」〔日本研究』第二集、国際日本文化研究センター、二〇〇〇年)は、もう一つの機能として「おもちゃ絵」をあげる。
- (85) 仲田勝之助『浮世繪襖記』(二見書房、一九四三年)。
- (86) 川添裕「江戸の見世物」〔岩波新書』(岩波書店、二〇〇〇年)九一―二六頁。
- (87) 原本は川添裕氏蔵。図版は「見世物はおもしろい」〔別冊太陽』(平凡社、二〇〇三年)二二―三頁を参照。
- (88) 原本は川添裕氏蔵。図版は「見世物はおもしろい」〔二四頁等を参照。
- (89) 原本は国立歴史民俗博物館蔵。図版は「病よ去れ」〔四六頁を参照。
- (90) 早稲田大学演劇博物館蔵。図版は「かわら版・新聞 江戸・明治三百事件」I、三〇頁や『日本の幻獣』三四頁等を参照。
- (91) 徳川林政史研究所蔵。図版は「日本の幻獣」四九頁、佐藤「流言蜚語」一七二頁等を参照。
- (92) 徳川林政史研究所蔵。図版は「日本の幻獣」四九頁、佐藤「流言蜚語」一七二頁等を参照。
- (93) 徳川林政史研究所蔵。図版は「日本の幻獣」四九頁、佐藤「流言蜚語」一七二頁等を参照。

若越郷土研究 四十九巻二号

- (94) 個人蔵。図版は湯本『明治妖怪新聞』口絵や『日本の幻獣』三三頁等を参照。
- (95) 予言はしないが、呪符として機能した幻獣の図に、火難悪難を避ける「緑鳥」の摺物(個人蔵)。「日本の幻獣」五一頁等を参照、寿命長久のための「風狸けん」の摺物(個人蔵)。図版は『日本の幻獣』五二頁等を参照)等がある。
- (96) 山本俊一『日本コレラ史』(東京大学出版会、一九八二年)。
- (97) 阿部康成「病へのフォーククロアと秩序」(岩田浩太郎編『新しい近世5民衆世界と正統』新人物往来社、一九九六年)。
- (98) 各地での「コレラ送り」の記事や、茶煙草・泥・石油・吐瀉物がコレラ除けになる等の記事。詳しくは「コレラの恐怖」(小野秀雄編『新装版新聞資料明治話題事典』東京堂出版、一九九五年、一〇九―一四頁)や「コレラ流行で大騒動」(鈴木孝一編著『ニュースで追う明治日本発掘2』河出書房新社、一九九四年、一五二―六頁)に収載の新聞記事を参照。中でも『大坂日報』明治十二年七月一〇日の次の記事は、猿と病除けの関係を考える上で興味深い。「今度の流行病蔓延に就て、金儲をした親王とも申すべきは猿村の神官にて、盛りなる時は一日に二百圓宛も猿の受が提りし由。何でも猿は石炭酸同様の勢と見えます。猿とは奇代なもので五猿。」
- (99) 興味深いことに西郷の死後、東京で「西郷吉之助隆盛」自身の名が「天行斑瘡除(水痘)」の呪いとして家の入口に張られたという(『読売新聞』明治十一年三月一六日)。
- (100) 高橋典子「呪いと占い―展示に沿って―」(『呪いと占い』六―八頁)によると、呪いの知識

- が民間に浸透した背景には、呪術を行使する宗教者・職能者(ムラの祈祷師や里修験など)があったという。
- (101) 島山豊「疱瘡・麻疹・虎列刺絵のことなど」(『錦絵に見る病と祈り』六〇頁)。
- (102) 「書かれたもの」が話の誕生や変容に作用する一例。佐藤「クダンの誕生は、予言事件」の話が誕生・変容する過程で「書かれたもの」が大きく作用したことを指摘し、話の口頭性を重視する従来の民俗学的アプローチを批判している。
- (103) 横田冬彦「近世村落社会における「知」の問題」(『ヒストリア』一五九、一九九八年)。
- (104) 寺沢一人「疫神の詭び証文のある家―東京都多摩地方の事例―」(大島建彦編『民俗のかたちとこころ』岩田書院、二〇〇二年)。
- (105) 『読売新聞』明治十二年九月七日号にも、短冊に書き付けた和歌を「コレラ病ハ愚か悪事災難除になる」との触れ込みで売っていた男の記事が載っている。
- (106) ひろたまさき「世直し」に見る民衆の世界像」(『日本の社会史7社会観と世界像』岩波書店、一九八七年)は、「世直し」観念の前提の一つとして、中間層(村役人家農商層)の世界像の一部に生じた「妖怪的世界」の存在を指摘している。
- (107) 佐藤「クダンの誕生」、同「くだんのイコノロジー」(『幻想文学』五六、一九九九年)は、「くだん」誕生の背景について、社会心理学的な還元主義に基づく単純な社会不安説を退けている。

「付記」

本稿の執筆にあたり、湯本豪一氏の一連の業績からは多くの学恩を蒙りました。また、氏には所蔵史料の写真掲載に際しても便宜を図っていただきました。末筆ながら、ここに深謝し申し上げます。なお、金沢大学資料館蔵松嶋家文書については、横井美里氏よりご教示を賜りました。この場を借りて、お礼申し上げます。